

奉願し得た、小梅村續ニ多し地所被仰付一同瓦職分仕、町並御年貢諸役等相勤、寛文中御代官伊奈半左衛門勝。忠様御勤役中奉願、永代賣井町並家作御免被仰付し由、尤先年出水之節書留等水腐仕、年月等睨と相知不申し得共、右之通申傳ニ御座し。且元祿六百年中迄町内北之方續當時水戸様御藏屋鋪之邊ニ瓦職之者罷在渡世仕ニ付、一體ニ南本所瓦町と相唱申し處、同年右之者共地面御用地ニ被召上、堅川通北松代町續ニ多し地被下置瓦職仕、南本所瓦町と相唱罷在しニ付、町内之儀を其砌方南本所元瓦町と相唱申し。正徳三巳年中方町御奉行松野壹岐守様坪内能登守様丹羽遠江守様御勤役中町方御支配ニ被仰付、地方之儀を御代官所御支配ニ御座し。

一、土手敷 貳間

右は、町内南側裏河岸通ニ有之、享保十六亥年中御代官伊奈半左衛門様御掛りニ多し御築立有之し。

一、町御奉行御代官兩御支配之場所ニ多し、當時山田茂左衛門様御代官所ニ御座し。

一、反別之儀を、

町内北側貳反三畝貳十四歩。

同南側壹反十六歩。

合三反四畝十歩。

此高四石壹斗貳升。

但、南本所町惣高貳百六拾九石八斗七升四合之内ニ御座し。

一、領名之儀を武州葛飾郡西葛西領之内ニ御座し。略。中

一、町内瓦竈員敷前之儀を相分り不申し得共、文化六巳年迄町内瓦師利右衛門方ニ多し瓦竈焚申し處、其後相止メ、當時瓦職之者無御座し。

——文政町方書上

小梅瓦町 亦是ノ前後ノ起立歟。

小梅瓦町

一、御城方寅卯之方道法凡壹里餘。

一、當町古之武州葛飾郡小梅村本高内ニ多し町方起立相分り兼し得共、御入國後伊奈半左衛門様御代官所ニ有之、元和寛永之御割付小梅村高内ニ有之、其後萬治年中右場所住居之者所持之田地御武家方御屋敷御用地等ニ被召上しニ付、寛文中伊奈半左衛門様ニ申上、右殘地居屋敷之内町家作いあり、商

ヒ等々致し取續申度相願ハ處、御聞濟有之、元祿十丑年御檢地入前、永代賣御免被仰付、其後寶永三酉年中家作御改御免本所地割御奉行所ニ御聞濟ニ相成、全百姓町屋敷ニ相成、其後正徳三巳年町御奉行御支配ニ被仰付、町方御代官兩御支配ニ御座ハ、瓦町ト唱ハ儀ト、居屋敷而已ニ多農業イ多シハ、地所々無御座、瓦細工イ多シ罷在ハ、ニ付、萬治寛文之頃ハ、瓦町ト唱ハ儀ニ、後御座ハ哉、元祿御水帳ニ、瓦町ト御記御座ハ。

一、川 幅拾七間。長四拾四間。壹尺五寸。 町内持ニ之無御座ハ。

右之源森川續ニ多、年曆不相知、切出來ハ、後、東之方ト東源森川、或ハ横川入堀共申唱ハ處、近來、切ハ東業平川ト唱申ハ、西之方ト源森川ト唱申ハ。略。中

一、小梅瓦町瓦竈員數、前々之儀ト相分不申ハ、得共、兩三軒有之ハ哉、ニ多、當時竈貳ヶ所御座ハ、願濟年代相知不申ハ、年中燒立ハ、瓦數、瓦竈貳ヶ所ニ付、壹ヶ年凡貳拾萬枚位ハ、貳拾四五萬枚位燒立申ハ、瓦土之儀ト木下川村邊、或ハ隅田村邊ハ、願濟之由ニ多、相對ニ多、舟土買受ハ、儀ニ御座ハ。

一、万古燒竈

右ハ小梅村内ニ多、寶曆之頃、瀬戸助ト申者、瀬戸物ヲ燒ハ、竈、安永年中、万古友

次郎ト申者、讓請、引續瀬戸物ヲ燒、万古ト唱、天明年中、御成先ニ多、入上覽ハ、儀有之ハ、所、其後追々不如意ニ相成、勢州古郷ニ付、引込、追々大破致シ、只今ハ、竈々相潰レ申ハ。略。中

一、反別四反八畝貳拾四步。

小梅村惣反別三拾貳町四反貳畝六步之内ニ御座ハ。

一、武州葛飾郡西葛西領ニ御座ハ。略。中

一、汐除地 長四拾四間一尺五寸。幅三間。

但南之方業平川付河岸地面、汐除堤、町内銘々地、先自普請所ニ御座ハ。

——文政町方書上

本所吉田町 寛文中本所、豎川通ニノ橋際ニ移ルト傳フ。

吉田町壹丁目 所。本

一、本所吉田町起立之儀ト、元小川町邊ニ罷在、松本町ト申ハ、由之處、寛永年中、東叡山御建立有之ハ、後、右地所、武家地ニ相成、御用地ニ被召上、寛文中本所、豎川通りニノ御橋際、當時相生町五丁目之所ニ多、代地被下置、尤爲引料、小間壹間ニ付、銀拾枚宛頂戴仕ハ。略。下

——府内備考

市街恢弘時代

吉田町自一町目至二町目 當町ハ、往昔小川町邊ニ在テ松本町ト稱セシカ、寛永年中東叡山御建立有シ後、御用地トナリテ武家ニ賜フ。斯テ寛文年中ニ至リ、本所堅川通り二ノ橋際今ノ相生町五町目ニテ代地ヲ賜ヒシ、略。○下

——府内誌殘編

本所相生町五町目

本所相生町五丁目

一、町内起立之儀、東角表京間貳拾間坪數四百坪之場所也、寛文元丑年茶屋長意拜領地ニ相成以得共、其砌モ町名何カ相唱申以哉相分り不申。略。○下

——文政町方書上

山谷淺草町

山谷淺草町

駒形ヨリ龜戸村ニ轉ス。寛文前ニ在リト云フ。姑ク此ニ附載ス。

一、町内之儀、往古駒形町之邊ニ罷在以所、御用地ニ相成以ニ付、爲替地、本所龜戸村之内五町四方地所被下、銘々替地ニ引移り以。略。○下

——文政町方書上

八軒町 此所ハ山谷淺草町ノ舊地ナリ。寛文以前火除ノ爲上リテ本所龜戸町ニ移サレ、其蹟閑地ニシテ、地域駒形町ノ西ニ續キケレハ、駒形廣小路ト呼

リ。

——府内誌殘編

深川元町

深川元町 南北本所村ト同時ニ、萬治中拓開セラレタル堅川以南小名木川以北ノ地ニシテ、寛文中ノ起立ニ係ルト傳フル市街少ナカラズ、其年月明カナラザレドモ、本所ノ市街取建ト前後シテ取建テラレタル者ナル可キハ之ヲ推スルニ難カラズ。本町ノ如キ亦其一也。今姑ク之ヲ本年ニ繫ク。

深川元町

一、右町起立之儀、古キ武州葛飾郡西葛西領深川村之内ニ御座以處、寛文之頃深川町方起發之砌、最初ニ町家作出來以場所ニ付、本元之町ニ御座以間、則元町モ名付、夫々追々町方出來仕以由申傳以。

一、深川起元之儀、書留等々無之、寢モ相知不申以得共、古來キ武州葛飾郡之内往古ト下總國內ニ御座以由一説申傳以。海濱之地所ニ有、一圓萱野ニ有御座以由。然ル處當町開發人深川八郎右衛門并外六人之者一同、攝津國出生之ものニ有、御入國前御當地ニ罷下り、當所ニ幽ニ埴生之住居營之罷在以處、乍恐神君様此邊始有爲、御鷹野被遊御成以砌、御場先ニ有八郎右衛門被召出地名被遊御尋以處、當邊萱野而已多く村里ニ隔以ニ付、地名々無御座以段、奉申上以處、左以ハ、其方

市街恢弘時代

苗字を以深川と名付、新田開發可致旨、奉蒙上意、則慶長元申年より起立仕、次第一ヶ村に相立、深川村と號し、由前書に申上し通り、後年追々町並家作出來仕、以二付、惣名深川村と名目相唱、在町共御代官御支配に御座し、處、其頃惣深川地境之儀を、南の方を小名木川を境、北の方を本所を境、西を大川を限り、東の方を同領猿江村邊を限り、一圓深川町と號し、由、其後正徳三巳年五月中町並屋敷之分を、丹羽遠江守様、松野壹岐守様、坪内能登守様御勤役中、町御奉行所御代官所兩御支配に相成し、儀に御座し、深川町惣高之内、當町分高四拾六石五斗八升、此反別三町八反八畝五步、御水帳高二御座し、處、元祿十丑年右町内之内高拾六石九斗八升、此反別壹町四反壹畝拾七步之場所、松平遠江守様、堀田伊豆守様御屋敷御用地に被召上、爲代地、本所法恩寺前并同寺東の方より元高拾四石三升貳合、此反別壹町壹反六畝貳拾八步、本所相生町四丁目五丁目之内より元高貳石九斗四升八合、此反別貳反四畝拾七步、右貳ヶ所より代地被下置し、然る處、右法恩寺前代地之儀を、本所法恩寺前深川代地と相唱し、處、近邊所々代地多く、度々間違しに付、已來深川元町代地と相唱申度、安永五申年中、牧野大隅守様御番所より奉願上、願之通被仰付し、後、深川元町代地と相

唱申し、且又本所相生町四丁目五丁目代地之儀を、其頃同町上ヶ地之内を代地に被下置し、由申傳、深川代地に御座し、得共、相生町之内に相籠り、同町名相唱、其砌、村方御年貢諸役、斗本村方より請取上納仕來、公事出入、其外町役之儀を、同町より仕來し、儀に御座し、且六間堀町代地之儀を、深川元町代地、續本所相生町五丁目之内より代地被下置し、譯柄、前書之通御座し、是を六間堀町と申上し。

但、前書六人之名の之内、今西甚兵衛金子、佐右衛門、苗字不相知、作右衛門と申し、之の名前申傳し、得共、其餘之姓名を相知不申し、尤右之内、今西甚兵衛子孫之儀を、只今以て名主役相勤罷在し、其餘之名の子孫之儀、追々斷絶仕し、當時一向相知不申し、本文、深川八郎右衛門儀、深川町方貳拾七ヶ町并村方共子孫代々名主役相勤相續仕し、所、七丁目八郎右衛門儀、組合清住町大達彌兵衛と申し、の家名退轉仕、右跡式、取建方之儀に付、組合一同不念之儀有之、御咎難斗し、に付、大勢之者を厭ひ、八郎右衛門壹人之越度、に申成し、寶曆七丑年十月七日入牢仕、同年十一月十一日出牢仕、御預ヶに相成し、處、同晦日病死仕し、依之御詮儀中、に爲御座し、間、名跡相續願、難相成、家斷絶仕し、尤開祖方代々

菩提所猿江泉養寺ニ墳墓御座也。且右之をの儀也。當所開發人子孫殊ニ前書大勢ニ代り也。越度を引請絶家仕也。儀ニ付、無縁ニ相成也。歎ケ敷、深川貳拾七ケ町申合セ、年々少々宛出銀仕、追善等不怠仕也。右ニ當町ニ拘り也。義ニ之無御座也。得共、深川起立之因御座也。間、此段書出し申也。

一、町内里俗之唱、西之方新大橋ヲ猿子橋ニ通り也。場所を、上元町ニ相唱申也。
一、猿子橋ヲ東之方ニ通り也。往來を表門ニ唱申也。右ニ鎮守神明宮鳥居有之、古來ノ門ニ無御座也。得共表門と相唱申也。

一、右町之内東之方ニ同所富川町ヲ猿江ニ通り也。場所を、東元町共下モとも相唱申也。

一、萬年橋番屋之儀也。町内南之方松平遠江守様御下屋敷前ニ有之。間口三間奥行三間半三尺之板庇付壹ヶ所、此坪拾貳坪有之。右橋番屋之儀也。松平遠江守様御屋敷一圓深川元町同所六間堀町之内ニ有之。右御用地ニ被召上代地被下置也。儀也。前條ニ申上も通り也。其頃自身番屋之由申傳、町内ニ御屋敷ニ相成也。得共、番屋之儀也。其儘御差置被下置、則同所萬年橋見守番屋ニ被仰付也。由申傳也。年舊儀ニ書留無御座御願年月相知レ不申也。其後寶曆八寅

年十二月右御屋敷と町内持御橋臺地所、町方御輿力衆遠江守様御家來箕浦幸左衛門殿御立合之上、檢地相改、繪圖面差出、朱引内ニ町内持ニ異變取斗、其外ニ御屋鋪持ニ御座也。

一、市定日

右ニ毎年七月十三日町内地先ニ同所高橋際迄之内、六時頃ノ五半時頃迄精靈祭之節、草物商人罷出商内仕也。右建初年代相知不申也。○中略。

一、舊家

名主當町 忠右衛門

右先祖本性也。今西氏ニ御座也。得共、四代目三郎兵衛事忠右衛門ヲ佐藤也。苗字相改申也。尤系圖古書物等度々之類燒ニ多燒失仕也。間、巨細之儀也。相知不申也。得共、申傳之分左ニ申上也。

一、先祖今西甚兵衛也。申也。の、前書ニ書上も六人之者之内ニ御座也。生國攝津國ニ當所開發人深川八郎右衛門同様、慶長年中御當地ニ罷下り、當深川其砌人家也。稀ニ多萱野多き場所之由、草創ノ當所ニ住居仕也。處、三代目忠七郎儀早世仕、外ニ男子無之也。ニ付、同人妹くにと申也。の、佐藤三郎兵衛也。申也。の、聳養子いとし、家督相續仕也。然ル處右三郎兵衛實家斷絶仕也。ニ付、實家苗

字相名乗申_い。乍併右様ニ有_い今西氏斷家同様ニ相成_いニ付、紋所_い源氏車
と相用不申、今西氏之紋丸ニ揚ケ羽之蝶相用_い由、右已來代々佐藤苗字相名
乗、紋所_い丸ニ揚ケ羽の蝶相用來申_い。然ル處六代目忠右衛門_い年寄役相勤、
七代目忠右衛門儀も引續年寄役相勤罷在_い處、安永年中名主役奉願_い後代
々名主役相勤罷在_い。

一、御番所跡

右_い當町南之方松平遠江守様御下屋鋪を相隔、萬年橋際ニ往古船改御番所
有_い之_い由、其後當時之中川口に御引被遊_い由申傳_い得共、起立_い勿論御引被
遊_い年代共相知不申_い。尤萬年橋_い西之方川端九間餘石垣ニ相成有_い之、右之
内ニ長貳間程之岩岐有_い之、右_い古御番所之岩岐ニ_い有_い之哉ニ_い奉存_い。右
場所之儀_い町内持場所ニ御座_い。

一、町御奉行御代官兩御支配ニ有_い、當時山田茂左衛門様御代官所ニ御座_い。尤
拜領地之分_い町御奉行御一手御支配ニ有_い、公役銀壹ヶ年銀拾貳匁宛差出し
申_い。

一、御檢地之儀_い、元錄八亥年酒井河内守様御檢地ニ有_い、在方町方一同ニ御座

い。

一、反別之儀_い、深川惣高五百九拾六石三斗六升壹勺六才、此反別五拾四町七
反三畝九步半之内、當町分三拾貳石五斗四升八合、此反別貳町七反壹畝七步
ニ御座_い。

但、往古_い高引等ニ相成_い譯_い、深川一體之書上ニ申上_い。

一、武州葛飾郡西葛西領之内ニ御座_い。

一、高札之儀_い、深川町一手持ニ有_い、深川北松代町三丁目、四丁目之間、旅所橋際
ニ有_い之、建替願、其外共同町ニ有_い取扱來_いニ付、同町名主次郎助_い可申上_い。

—— 文政町方書上

元町

一、右町起立之儀、古_い武州葛飾郡西葛西領深川村之内ニ御座_い處、寬文之頃
深川町方起發之砌、最初町家作出來仕_い場所ニ付、本元之町ニ御座_い間、則元
町_い名付候_い、追々町方出來仕_い由申傳_い。

一、町内東側町家、南北_い表間口京間拾九間五寸、裏幅同拾九間貳尺、東西_い
裏行南之方四拾五間北之方同拾間八寸。

北側町屋 東西の表間口三拾八間四尺、裏幅三拾六間壹尺五寸、南北の裏行東之方拾七間貳尺五寸、西之方貳拾間壹尺五寸。

一、四隣 東之方深川六間堀町、西之方大川、南之方松平遠江守様御下屋鋪北之方町に圍御糶藏。

一、東側町屋 南北の表間口三拾貳間壹寸、裏幅三拾壹間五尺壹寸、東西の裏行南之方拾五間三尺五寸、北之方入組拾五間。北側東西の表間口五拾壹間貳尺三寸、裏幅五拾間壹尺六寸、南北の裏行東之方貳拾五間三尺五寸、西之方三拾八間八寸。

一、四隣 東之方同所森下町、西之方同所神明門前、南之方深川常盤町、北之方同所森下町神明社地。

一、北側町家 東西の表間口百拾貳間四尺壹寸、裏幅百拾六間五尺、南北の裏行東之方六拾壹間三尺、西之方貳拾六間貳尺。南側町家東西の裏間口三拾七間九寸、裏幅四拾六間、南北の裏行東之方四拾九間三尺四寸、西之方四拾六間三尺。

一、四隣 東之方春山大膳亮様御下屋敷、西之方小笠原壹岐守様御下屋鋪、南

之方御徒土方組屋敷、北之方深川三間町五間堀川向神保磯三郎様御屋敷。

一、町内里俗之唱、西之方新大橋の猿子橋の通申の場所を上元町と唱申し。

一、猿子橋の東之方と通り往來を表門と唱申し。右の鎮守神明宮鳥居有之、

古來の門者無御座に得共表門と相唱申し。

一、右町之内東之方と同所富川町の猿江の通り場所を東元町共下モとも相唱申し。○中略。

一、川 幅百三拾間程

右の町内西之方と有之大川を唱し。水上之儀を當町北之方松平遠江守様御屋敷前の相流申し。

一、川

右の町内南之方小名木川を唱し。當町并同所海邊大工町見守仕の萬年橋相掛り川と多、大川を流し同所海邊大工町前の相流申し。

一、橋

右の當町南之方小名木川の掛渡し有之萬年橋を唱申し。名目唱之儀相知不申。長貳拾貳間、幅貳間、橋臺左右鏡通六間宛、登り西之方四間三尺、南之方三

間四尺御座也。右初多掛渡シ之年代相知不申也。尤御入用橋ニ多當町并海邊大工町ニ多見守仕來也。

一、橋

右之當町南之方小名木川ニ掛渡シ有之高橋と唱申也。名目唱之譯相知不申。長拾八間幅貳間、橋臺南北鏡通三間、登り北之方五間、南之方四間三尺有之、初多掛渡之年代相知不申也。是又御入用橋ニ多、當町并同所常盤町、同所海邊大工町ニ多見守仕來申也。

一、新大橋

右之當町西之方圍御糶藏、西之方より申之方に相渡也橋ニ多、長サ百八間幅三間有之、右起立并東西橋臺葎張茶屋願濟之儀也、町内持往還之外ニ付、右橋掛り深川海邊大工町名主八左衛門、同所平野町名主甚四郎取扱也儀ニ御座也。

——府内備考

御船藏前町

御船藏前町 亦寛文頃ノ起立ト傳フ。

深川御船藏前町

一、當町起立之儀也、古々武州葛飾郡西葛西領深川村之内ニ御座也、處寛文之

頃深川町方町家御免ニ相成申也、由申傳、委細深川元町方申上も通ニ御座也、町銘之儀也、西之方御船藏ニ付、則御舟藏前町と相唱來申也。尤町方家作間數之内、寶永二酉年三月中屋敷御改赤井六兵衛公。様阿部甚三郎美。正様御懸りニ多、御船藏前通り表間口地主共地先之儀三間三尺拾間壹尺五寸迄引下ケ家作可仕旨被仰渡也ニ付、引下ケ也所、其後右跡江葎張水茶屋差出申度奉願、御願濟ニ多當時之姿ニ相成申也。尤右御願濟年月書留無御座相分不申也。正徳三巳年五月中丹羽遠江守守。長様松野壹岐守助。様坪内能登守定。様御勤役之節、當町之儀も町方兩御支配ニ被仰付、町並屋敷ニ御座也。

一、御船藏 拾四所

右之町内西之方大川端ニ有之、惣御構南之方武家方御進退、櫛木御植付場境堀々北之方水戸様石置場境堀迄、凡長八拾間程幅凡三拾間程有之、右地所石高引等ニ相成也、譯相知不申也ニ付、立初リ年代相知不申也。

一、町内里俗之唱當町前通り御船藏之内安宅丸御船御埋被遊也、由、右故安宅と里俗相唱申也。

一、舊家

當町家持

善 四 郎

市街恢弘時代

右先祖小林宗兵衛が代々當所ニ住居仕、二代目宗兵衛伴善四郎が代々善四郎と相名乗來申し、尤系圖古書物等と類焼之節焼失仕し、巨細之儀と相知不申し得共、申傳之趣左ニ申上し。

一、右先祖小林宗兵衛儀と、同所淨土宗西光寺開基小林休西伴八左衛門伴ニ有之、小林宗兵衛と相名乗、天和貞享之頃ニもい哉、當所ニ別家致住居罷在し所、本家八左衛門儀と其後年月不相知斷絶仕し趣申傳ニ御座し。然ル所二代目宗兵衛儀延享元子年五月新大橋取拂被仰付し砌、同所森下町家持半七と申しの召仕ニ相成、右御橋町橋ニ被下置し様石河土佐守朝。政様ニ奉願し所、同六月右土佐守様御役替御跡役能勢甚四郎。頼様御番所ニ被召出願之通被仰付、其砌右橋請負相勤來し所、前書宗兵衛半七兩人共其後病死仕しニ付、宗兵衛伴善四郎ニ請負奉願壹人ニ多代々請負相勤罷在し内、佐内町徳次郎店忠右衛門と申しの善四郎相仕御請負仕度、寛政元酉年四月中奉願上、兩人ニ多相勤罷在し儀ニ御座し。然ル所文化六巳年二月中十組問屋共ニ橋引受被仰付善四郎儀ハ起立由堵も御座しニ付、橋番人ニ被仰付相勤罷在、

文政二卯年六月中十組問屋共橋引請被召放、當時と本所御掛り町年寄衆御取扱ニ相成申し、善四郎儀と只今以橋番人相勤罷在し。

- 一、町御奉行御代官兩御支配ニ多、當時山田茂左衛門様御代官所ニ御座し。
- 一、反別之儀と深川惣高五百九拾六石三斗六合壹勺六才、此反別五拾四町七反三畝九步半之内、當町分高拾壹石五斗四升此反別九反六畝五步ニ御座し。
- 一、武芻葛飾郡西葛西領之内ニ御座し。

——文政町方書上

深川六間堀町 寛永ヨリ天和頃マテ漸次發達シタル百姓町家ナリト傳フ。今

附記ス。

深川六間堀町

一、當所之儀と同所元町ニ多申上し通、武州葛飾郡西葛西領深川村之内ニ多、慶長元申年開發之旨申傳、同所之内分郷ニ多古來々伊奈半左衛門様御代官所ニ有之、地方之儀と惣名深川町之内分郷六間堀と相唱、深川村高二籠り、御水帳之儀も深川町一體ニ御座し、町屋取建之儀と、寛永年中より天和之頃迄百姓町屋が家作之義一ト地面二地面ツ、追々伊奈半左衛門様ニ奉願、御免被仰付し町場ニ多、正徳三巳年閏五月が町御奉行所兩御支配ニ被仰付、地方

之儀を御代官所御支配ニ多郷中村役都多一同相勤也。御年貢地町並屋敷ニ御座也。且又右場所之内ニ多元録十丑年以來寛政九巳年中迄御用地上ケ地代地等之入狂有之儀也。委細深川町カ申上通御座也。

但當所里俗南組北組ニ相成罷在六間堀町一體ニ多場所も入會ニ相成有之得共場廣ニ多町用不辨利ニ付南組ニ唱分ニ町内中ノ橋ニ番屋有之北組ニ北ノ橋際ニ番屋有之町用相勤申也。右南組ニ唱分場所南之方反別五反六畝貳拾九步當時糶藏御建添地ニ相成也場所寛政九巳年十一月類焼跡町御奉行村上肥後守様御掛リニ多橋富町ニ同様御用地ニ被召上當町代地ニ牛込神樂坂上ニ多相渡當時深川六間堀代地牛込岩戸町壹丁目貳丁目ニ相唱申也。然ル處右之通代地場所相隔町用不辨利ニ御座也間寛政十二申年中カ町方之儀右岩戸町壹丁目ニ最寄牛込看町名主五三郎ニ支配付ニ相成貳丁目之儀も同所御筆笥町名主久左衛門ニ支配付仕地方之儀も元地當所ニ一體ニ多御年貢諸役相勤是迄之通元支配ニ多罷在也。并當所西之方ニ多元録十丑年七月堀田伊豆守様御屋敷并松平遠江守様御屋敷渡り御用地ニ被召上也地所之内當町分壹反壹畝八歩之

場所本所二ノ橋北側本所相生町四丁目五丁目之内ニ多代地御割渡ニ相成地方之儀も以前之通元地ニ多取扱町役勤方之儀も右町ニ組合町名相生町ニ唱分方之儀も同町名主長兵衛支配仕也。委細之儀も同町カ申上也。一當町北組ニ唱分場所之内古來カ町屋中ニ袋地ニ多三百坪餘武家方拜領地有之當所町地間口壹間裏行貳拾五間右拜領主ニ道地ニ持添也町並抱屋敷有之右拜領地起立等も相分不申前々カ前書仕向ケニ有之當時御留守居御支配御簾中様御廣敷添番篠崎傳右衛門殿拜領屋敷ニ有之町屋敷之儀も同様所持被致町並抱屋敷ニ御座也。一里俗唱之儀も町内猿子橋カ中之橋之邊を南組北之橋之方を北組ニ相唱申也。

一、火之見櫓 間口三間奥行貳間半此坪七坪五合。
右町内南之方猿子橋東橋臺際ニ有之本所深川町火消組合之内當所最寄七ノ組并南之方小名木川南側通同所海邊大工町同所清住町同所靈岸寺門前町右三ヶ町ニ六ノ組ニ相唱兩組ニ多前々カ新規修復共取扱也處本所四ノ橋際之邊ニ六ノ組之内南松代町壹丁目貳丁目三丁目寛政二戌年正月類焼

後御用地ニ被召上、當所六ノ組、七ノ組場所ニ入會場所ニ多代地被下置、町名常盤町々相唱、右町三丁分御座也。依之右三ヶ町も當時右火之見櫓組合ニ相成申也。起立之儀也、舊記無御座相知不申也。然ル處同所南之方當時井上河内守様御中屋敷、元祿六百年之頃大久保加賀守様初御拜領地ニ相渡り、御屋敷御出來ニ也處、其頃當所向寄火之見等也無之、出火之節也加賀守様御屋敷火之見櫓之知らセを聞取也、辨用致居也處、其後年代不相知、加賀守様御屋敷替被成也節、當所之者共加賀守様相願、御持來之火之見其儘當所被下、則當時之場所被建替也由を申傳、前々火事有之爲知也、半鐘を打、鎮り也爲知也、板木を打申也。書留等也無御座也、得共前書之通加賀守様被下也、由緒ニ多、當所ニ多也、板木を相用也、旨申傳罷在也。

但、半鐘之儀也度々鑄替也、多古鐘也、無御座、銘文も無御座也。

一、六間堀川 幅六間

右町内地先相流也、横川ニ多、上北之方、豎川ノ末、南之方、小名木川ニ相流申也。川名六間堀也、相唱、御堀割等之年、月舊記無之、相知不申也。

但、東北之方、柴田出雲守様御屋敷境、彌勒寺橋之方、相流也、川之義ハ、御

同所様御屋敷角、五間幅ニ相成、則五間堀也、相唱申也。

一、猿子橋 長五間、幅貳間、板橋ニ多、御入用橋ニ御座也。

右町内南之方ニ有之、六間堀川ニ相掛り、當町東側、西側ニ相渡也、橋ニ御座也。前々御入用橋ニ多、御掛渡之年、代橋名之起り等、舊記無之、相知不申也。

一、中之橋 長五間、幅九尺、板橋ニ多、御入用橋ニ御座也。

右町内中程ニ有之、右猿子橋也、同様東側、西側ニ相渡也、橋ニ多、其外前書同斷ニ御座也。

一、北之橋 長五間半、幅貳間、板橋ニ多、御入用橋ニ御座也。

右町内北之方ニ有之、右貳橋、同様六間堀川ニ相掛り、本所筋、新大橋之方、通行場所ニ御座也。橋名之起り、御掛渡年月等、右三橋、共同様相知不申、尤三橋共、當町ニ多、見守仕也、持場ニ御座也。

一、玃樋 四ヶ所

内

一、猿子橋際火之見櫓北之方 壹ヶ所

幅貳尺九寸

右之町内東之方同所神明門前之方々西之方六間堀川之相流以下水吐口
ニ御座也。

一、北之橋南之方 壹ヶ所

幅貳尺五寸。

右之南側東之方同所森下町之方々西之方六間堀川之相流以下水吐口ニ
御座也。

一、同所北之方西側ニ 壹ヶ所

幅四尺五寸

右之町内西裏通武家地之方々東に町屋中六間堀川之相流以下水吐口ニ
御座也。

一、中之橋南際糶藏御建添地際ニ 壹ヶ所

幅三尺。

右之西之方同所八名川町之方々糶御藏下水通六間堀川之相流以下水吐
口ニ御座也。

右四ヶ所共往來河岸迄之御入用ニ多出來仕、町内ニ多見守仕、起立之儀相知

不申也。

一、物揚場 四ヶ所

内

一、東側神明中門通道地先 壹ヶ所

幅貳間。

右之町内并東之方同所森下町同所元町邊迄之向寄物揚場ニ有之、尤異變
等之儀之當町持ニ多、修復入用等之儀之向寄も助合申也。

一、東側神明裏門道地先 壹ヶ所

幅貳間。

右町内東之方同所森下町邊迄向寄之物揚場ニ有之、其外前書同斷。

一、西側自身番屋南之方 壹ヶ所

幅貳間。

右之町内西之方武家方八名川町邊迄之物揚場ニ有之、其外前書同斷。

一、西側中之橋際南之方道地先 壹ヶ所

幅貳間。

右七町内西之方八名川町邊迄之物揚場ニ有之、其外前書同斷。

一家前河岸地幅貳間ハ五間、長延三百八拾間餘之場所、地先之者物置場ニ致罷在、建もの物置等用辨仕ハ分セ、去ル文政七申年中ハ壹坪ニ付銀壹分宛冥加上納仕ハ。

一、真光寺跡○中略。

一、泰耀寺跡○中略。

一、當町東側町屋東隣ニ有之ハ當所鎮守ニ多六間堀神明ト相唱、別當之儀ト同所猿江泉養寺持ニ御座ハ。右セ慶長元申年之頃當所之邊一圓深川村ト申、百姓家起立仕ハ頃當所ニ有來リ、則當所之鎮守ニ祭りハ社ニ多、當時惣名深川町六間堀ト相唱ハ兩村高内之村町之分氏子ニ有之、當町并同所元町右貳ケ町氏子宮元ト相唱、鎮守之儀都多世話仕、神明境内御除地ニ多、別當泉養寺後古來ト當時當所南之方井上河内守様御中屋敷之場所ニ有之、元祿六百年之頃當時之場所ハ寺地拜領替ニ相成、神明之義ト舊地當時之場所ニ多、前々ハ正月十三日五月十三日九月十三日、壹ケ年三度ツ、祭禮定日ニ御座ハ處、年代不相知、祭禮執行仕ハト壹ケ年九月十三日一度宛ニ相成申ハ、然ル處寬

永年中御三代様御代年月不相知、葛西筋ハ被爲成、還御之節當所御通御座ハ砌、百姓共當社其頃小祠ニ多御座ハ哉、社前ニ寄合酒宴致ハを御尋有之、鎮守祭禮ニ多神酒開ハ趣申上ハ處、御拳之鷹藁ト之儘百姓共ハ被下置ハ由申傳、右を舊例ニ仕、唯今以町内南組ト相唱ハ場所之者共地面順當番を相立、御當家鷹振舞ト相唱、毎年祭禮之節藁ト之を拵ハ、町内名主家主共一同相揃、社内ハ持參仕拜禮相濟、右藁ト持歸、當番之者宅ニ多一同神酒開キ、舊例之格式取斗退散仕ハ。

但、右藁ト仕様之儀ト五穀成就之村名認メハ紙札并町内名主家主共名前左之通粘入、紙ニツ折ニ認ハを此ト入、其上を藁ニ多月之數ニ形取ト二ケ所、閏月有之年ト十三ケ所ニ結ハ申ハ。

天下泰平

五穀成就

六間堀村

村中安全

た	た	た	た	た	海邊氏
れ	れ	れ	れ	れ	家守

右之通名主八左衛門苗字并ニ家主共勤順ニ名面相認申上。

右ニ住古々舊例ニ付此段申上。

一、町御奉行所御代官所兩御支配ニ多、當時山田茂左衛門様御代官所ニ御座

一、葛飾郡西葛西領之内ニ多、深川村一體之高内分郷仕ハ場所ニ多、惣名六間堀ニ相唱反別一體ニ御座。

一、反別之儀ニ當町分三町九反九畝廿八步九厘之場所ニ御座。但、惣名六間堀惣反別之内ニ御座。

一、御檢地之儀ニ、深川町一體ニ多、元祿八亥年酒井河内守様享保十七子年筥播磨守様寛政二戌年伊奈右近將監様再御檢地御座ハ場所も有之、委細深川町カ申上ハ通御座。

——文政町方書上

深川常盤町 寛文中百姓町家ト爲ルト云フ、姑ク附記ス。

深川常盤町
深川常盤町壹丁目

深川常盤町壹丁目

一、當町之儀ニ、惣名六間堀高之内ニ多、起立之儀ニ同所六間堀町カ申上ハ通

ニ有之、當町元本所四ノ橋際南側ニ多、南松代町壹丁目、貳丁目、三丁目、四丁目

ニ相唱、寛文中百姓町屋御免ニ相成、正徳三巳年町方兩御支配ニ相成。反

別貳丁八反六畝拾壹步之場所ニ御座。寛政二戌年正月廿二日壹丁目、貳

丁目、三丁目類焼仕ハ處、町御奉行池田筑後守様御掛ニ多、同年四月十五日右

壹丁目カ三丁目迄反別貳丁壹反四畝貳拾八步之場所猿江御材木藏火除御

用地ニ被召上、壹丁目、貳丁目ニ當所高橋際戸田因幡守様御中屋敷上地并三

丁目カ本所二ノ橋通田沼能登守様御下屋敷上ケ地之内并御同人様永御預

り地ニ多、代地被下置ハニ付、元町名松之縁を以町名常盤町壹丁目、貳丁目、三

丁目ニ相唱、元地續ニ有之ハ四丁目之儀ニ、元地ニ罷在、其後四丁目カ不相唱、

深川南松代町と而已相唱申_い。

但、當町三丁分一體ニ多高役相勤_い得共、壹丁目、貳丁目と地所入會有之、一
卜組ニ相成町用相勤、三丁目と場所も隔_りい間町用と別段ニ相勤申_い。且
又寛政二戌年當町壹丁目北之方之分裏通ニ多御割殘地八坪三合之場所、
文化八未年中永田備後守様御掛_りニ多町屋_い圍込_い拜借地ニ多、地代金
上納仕_い。

一、小名木川 幅貳拾間餘。

右と町内南地先ニ有之、上と東之方同所扇橋之方々西之方大川_い流行申_い。

一、高橋 長拾八間幅貳間板橋ニ多御入用橋ニ御座_い。

右町内南之方川境同所海邊大工町之内里俗高橋組_い御掛渡有之橋ニ多、起
立年月等相知不申、前々_い御入用橋ニ御座_い。右橋北之方と當町并同所元町
ニ多見守致、南之方と前書高橋組ニ多見守仕、橋名之起舊記無之相知不申_い。
一、葛飾郡西葛西領之内ニ御座_い。
一、反別之儀と當町三丁分一躰ニ多壹町六反四畝六步之内、壹丁目分七反九
畝拾貳步之場所ニ御座_い。

但、惣名六間堀惣反別之内ニ御座_い。略。下

深川常盤町貳丁目

一、當町起立元地代地年代町名之起等、同町壹丁目ニ多申上_い通御座_い。

一、反別之儀と當町三丁分一體ニ多、同町壹丁目_い申上_い通ニ有之、當所貳丁
目分三反九畝拾壹步之場所ニ御座_い。

但、惣名六間堀惣反別之内ニ御座_い。

一、町御奉行所御代官所兩御支配、且西葛西領之内ニ多、六間堀一體之譯并御
檢地等之儀壹丁目ニ多申上_い通御座_い。

深川常盤町三丁目

一、當町之儀も起立元地代地之年代町名之起_り等、壹丁目ニ多申上_い通御座
_い。

一、自身番屋之儀と、無御座_い。町内南之方店並貸長屋借屋仕、番屋ニ相用町用
相勤申_い。

一、彌勒寺橋

右と當町南之方同所森下町_い相渡_い五間堀川_い御懸渡有之、御入用橋ニ御

市街恢弘時代

座し、委細同所森下町を申上し。

一、反別之儀を當所三町分一體に同町壹丁目を申上し通に有之、當所三丁目分四反五畝三步之場所に御座し。

但、惣名六間堀惣反別之内に御座し。

一、町御奉行所御代官所兩御支配并西葛西領之内に、六間堀一體之譯且御檢地等之儀、壹丁目を申上し通に御座し。

——文政町方書上

深川富川町

同シク附記ス。

深川富川町

一、當町之儀も武州葛飾郡西葛西領深川町分郷惣名六間堀石高之内に、古來伊奈半左衛門様御代官所に有之、起立之年代町並屋敷に相成し子細之儀を、右深川町を委細申上し通御座し。且町内三ヶ所に相隔り、里俗神保前を唱し西側之内百四拾貳坪九合之町並屋敷、寛政八辰年十二月中の一橋様御附御物頭野々山市郎右衛門様御所持に、當時御住居被成し。

一、里俗唱之儀を、町内西之方神保磯三郎様御屋敷續之邊を神保前を唱南之方田安様御花屋敷并土屋相模守様御下屋敷前通を田安前土屋前を相唱、東

之方武家境南北之町屋地尻に有之場所、文化十酉年中賃長屋百軒程一時新規に普請仕し以來、百軒長屋を異名相唱申し。

一、反別之儀を當町分壹丁五反五畝拾歩之場所に御座し。

但、惣名六間堀惣反別之内に御座し。

一、御檢地領名之儀并兩御支配等之儀を、六間堀町を申上し。

——文政町方書上

深川森下町

寛文頃ノ起立ト傳フ。

深川森下町

一、當町起立之儀、古く武州葛飾郡深川村之内に、委細元町を申上し通り、寛文之頃町家御免に相成申し趣申傳し。往古此邊人家も稀に有之、明曆萬治之頃に、森下屋敷當町を西之方酒井左衛門尉様御下屋敷に、當時を小笠原壹岐守様御下屋敷に森之場所、往古を深川村之内に有之、右御屋敷内木立も生茂り有之し由に、森下と唱し處、追々町家も出來仕、壹ヶ町に相成森下町と相唱申し由申傳し。右小笠原壹岐守様御屋敷に相成し、元祿十丑年中に御座し。然ル處同年右町分高五拾三石八斗九升貳合此反別四町四反九畝三步

市街恢弘時代

之内、高拾石反別八反三畝拾歩之場所御用地ニ被召上代地として右御屋敷北之方ニ被下置○中得共、るそり町内續ニ御座○中也。

一、町内里俗之唱、當町南之方元町に付分上森下町を相唱申也。北之方四ツ辻有之、右四ツ辻を南之方を森下町南組と唱へ、四ツ辻より北を北組と唱申也。

一、同斷上森下町之内、西之方横町を神明中門と唱へ、尤同社表門有之、中通りニ付、右之通申ふと申し哉ニ奉存也。

一、同斷森下町南組之内、西之方横町を裏門と唱へ申也。神明社地裏門有之、右之往來有之ニ付申ふと申し哉ニ奉存也。

一、同斷同町東之方横町を膳之縁と相唱へ申也。右を町内を四角ニまじりて縁を持、申ふと申し哉ニ奉存也。

一、同斷森下町北組之内、西北之川岸通りを竹川岸と相唱へ申也。右を川附ニ多材木渡世之もの住居仕、竹木等商ひ仕に付、右之通申ふと申し哉ニ奉存也。○中

一、當町河岸地之儀を北組之内、北之方家前幅六間を五間三尺長五拾五間之

場所、地先地主共物置場ニ致用辨仕也。處、去文政七申年中、壹坪ニ付銀壹分宛冥加上納仕也。○中

一、町御奉行御代官兩御支配ニ多、當時山田茂左衛門様御代官所ニ御座也。

一、反別之儀を深川惣高五百九拾六石三斗六合壹勺六才、此反別五拾四町七

反三畝九歩半之内、當町分高五拾三石八斗九升貳合此反別四町四反九畝三

歩ニ御座也。——文政町方書上

深川南松代町 寛文中百姓町家ト成ル。

深川南松代町

深川南松
代町
深川南松
町代

一、當町之儀を、武州葛飾郡西葛西領深川町分郷六間堀惣高之内ニ多、古來伊奈半左衛門様御代官所ニ有之、起立年代町並屋敷ニ相成也。譯柄等之儀を、同所深川町を申上り通、寛文之頃百姓町屋御免ニ相成、正徳三巳年五月中丹羽遠江守様松野壹岐守様坪内能登守様御勤役中、町御奉行所御代官所兩御支配ニ相成、當所南松代町壹丁目、貳丁目、三丁目、四丁目を相唱申也。明和五子年十一月、中町内類焼之節、町御奉行牧野大隅守○成様御掛ニ多、右壹丁目之内、反別貳反三畝貳拾七歩并拜領地貳ヶ所入會、御材木藏火除御用地に被召

市街恢弘時代

上代地之深川佃町西續ニ御割渡ニ相成當時深川南松代町代地ニ相唱申
 以處猶又寛政二戌年正月廿二日右壹丁目殘地并貳丁目三丁目不殘類燒仕
 池田筑後守様御掛リニ多右三町共御材木藏火除御用地ニ被召上壹丁目貳
 丁目之同所小名木川通高橋際戸田因幡守様上ケ地三丁目之本所二ノ橋通
 田沼能登守上ケ地ニ多代地御割渡ニ相成其節町名相改當時深川常盤町壹
 丁目貳丁目三丁目相唱其已來當所四丁目不唱深川南松代町而已相
 唱右三町分立跡之儀人足寄場附ニ相成以後御同所持地ニ御座以且又當
 所町名起リ之儀舊記申傳も無之相知不申尤當所元地之往古眞田伊豆守
 様御抱屋敷ニ多年月不相知百姓立歸リ地ニ相成以趣申傳有之伊豆守様之
 信州松代御在城ニ付右之因ニ多町名ニ唱松代町ニ名付以哉ニ以得共聴
 申傳も無御座以

一、豎川 幅貳拾間餘。

右之町内北裏地先を相流上之東之方逆井口之西之本所茅場町之方之流行
 申以川名之起御堀割年月等舊記無之相知不申以。

一、十間川 幅拾間餘。

右之町内西之方地先豎川之南小名木川之横川ニ有之、沙合之場所ニ多流
 相定リ不申、里俗十間川ニ相唱御堀割年月等舊記無之相知不申以。

一、清水橋 長八間幅壹丈、板橋ニ多御入用橋ニ御座以。

右町内西之方地先當所之西之方御材木藏火除明地之方之相渡リ以橋ニ多、
 前々御入用橋ニ御座以。尤當町并同町三丁目ニ多見守仕以處、前書橋番屋
 之廉之申立以通、同町三丁目御用地ニ相成以後、當町一手見守場ニ相成申以。
 御掛渡起立橋名之起リ、舊記無之相知不申。尤古來當時本所清水町之儀、元
 上野清水門外ニ有之、一旦當所之邊之代地渡ニ越來、猶又當時之場所之再引
 地ニ相成以由ニ有之、其頃右橋掛渡以故、清水橋ニ名付以哉。且又右橋西橋臺
 際川中ノ清水涌出以由、夫故之橋名ニ可有之、杯老人共雜談申以儀も有之、勿
 論當時之川土埋リ涌水仕以儀相知不申以、得共雜談仕以儀ニ付申上以、當町
 ニ多見守仕、御掛渡起立橋名之起リ、舊記申傳等も無御座相知不申以。
 一、町御奉行所、御代官所兩御支配ニ多、當時山田茂左衛門様御代官所ニ御座
 以。

一、葛飾郡西葛西領之内ニ多、深川村一體之高内分郷仕以場所ニ多、惣名六間

堀と相唱反別一體ニ御座也。

一、反別之儀也、當町分七反歩之場所ニ御座也。

但、惣名六間堀惣反別貳拾丁五反拾貳歩半之内ニ御座也。

一、御檢地之儀也、深川町一體ニ多、元錄八亥年酒井河内守様享保十七子年寛

播磨守様御檢地ニ御座也。——文政町方書上

深川南松
代町地

深川南松代町地。略。中

一、右町元地之儀也、往古武州葛飾郡西葛西領深川村之内、寛文之頃百姓町屋

御免ニ相成、本所茅場町貳丁目續ニ多、深川南松代町壹丁目貳丁目三丁目

相唱。——文政町方書上

深川北松代町 寛文頃歟若クハ寛文前所謂百姓御免町屋ト爲ル。

深川北松
代町

深川北松代町壹丁目

深川北松
目代町壹町

一、當町之武州葛飾郡西葛西領之内ニ多、委細元町々申上ハ通りニ御座也、元

地之儀也、當時之深川高橋阿部對馬守様御藏屋鋪之所々、同所御徒土方御組

屋鋪邊一圓元地之由ニ多、右場所ニ罷在ハ砌伊奈半十郎様御支配之節、年月

不知百姓御免町屋ニ被仰付、罷在ハ處、明曆之頃ニ多、御座也哉、年代耽ル書留

無御座相知不申ハ得共、御用地ニ被召上、代地當時之場所、元之本所清水町立

跡上。收。之由、右地所爲替地被下置、元地之如く百姓商賣屋取建、永代賣家作

御改御免被仰付ハ。略。下

深川北松代町貳丁目

深川北松
目代町貳町

右町起立之儀、古之武州葛飾郡西葛西領之内ニ多、委細同町壹丁目々申上ハ

通ニ御座也。略。下

深川北松代町三丁目。略。中

一、町方起立之儀也、北松代町壹丁目々申上ハ通ニ御座也。略。下

深川北松代町四丁目

一、町内起立之儀也、北松代町壹丁目々申上ハ通ニ御座也。略。下

深川北松代町裏町

一、右町古之武州葛飾郡西葛西領之内ニ多、委細元町々申上ハ通ニ御座也、尤

當町元地之儀也、北松代町同様ニ多、是又同町々書上ハ通、御用地ニ被召上、當

町元之御武家方御屋敷立跡ニ多、御座也哉、當時有形之通、代地被下置、當場所

引移、百姓商賣家取建、住居仕、其砌之伊奈半十郎様御支配ニ多、家作御改場、

深川北松
目代町三町

深川北松
目代町四町

深川北松
代町裏町

永代賣家作御免場ニ御座ハ。略。下。

文政町方書上

深川西町

一、當町之儀も武州葛飾郡西葛西領深川分郷六間堀之内ニ多、古來伊奈半左衛門様御代官所ニ有之、起立之年代町並屋敷ニ相成ハ。譯等之委細、同所深川町ハ。申上ハ。通ニ御座ハ。町名起り之儀也、町屋東後之川を前々ハ。横川相唱、右横川西側付之場所ニ付西町ハ。町名ニ仕ハ。儀ニ有之、既ニ當町川向ニ有之、町屋を東町ハ。相唱申ハ。尤舊記申傳も無御座ハ。

一、小名木川 幅拾六間。

右町内南之方地先ニ有之、上ハ。東之方同所猿江町之方ハ。末同所海邊大工町之方ハ。流行申ハ。寛永年中御堀割御座ハ。由ニ申傳、川名起り之儀相知不申ハ。

一、大横川 幅貳拾間。

右町内東裏通地先、上ハ。北之方本所菊川町之方ハ。南小名木川ハ。相流申ハ。御堀割其外川名之起り舊記無之相知不申ハ。

一、新高橋

長拾六間幅貳間、板橋ニ多御入用橋ニ御座ハ。

右町内南之方小名木川ニ有之、當所ハ。南之方同所扇橋町ハ。相渡ハ橋ニ多、御掛渡起立最初也、當時之場所西之方同所海邊新田松平丹波守様御屋敷前ニ有之、元祿六百年中御掛渡ニ多、其後同十丑年中場所替ニ相成、當時之場所ニ橋御出來之由ニ御座ハ。尤當町ニ多見守仕ハ。橋名起り之儀、同川筋西之方海邊大工町ニ高橋ハ。唱ハ橋有來ハ。間、當所ハ。新高橋相唱ハ。哉、舊記無之子細相知不申ハ。

一、猿江橋 板橋ニ多御入用橋ニ御座ハ。

右町内南之方横川ニ相掛り、當所ハ。東同所猿江町ハ。相渡ハ橋ニ御座ハ。右ハ猿江町持場ニ多、委細同所ハ。申上ハ。

一、物揚場 壹ヶ所 幅三間。

右町内南之方新高橋北橋詰西之方ニ有之、當所物揚場ニ多起立年月相知不申ハ。

一、同斷 壹ヶ所 幅貳間。

市街恢弘時代

右同所西之方家前ニ有之、前々々有來、起立年代相知不申也。

一同斷 壹ヶ所 幅三間。

右町内北之方中道地先ニ有之、當所并向寄場所之物揚場ニ有之、尤町内持ニ
多修復其外入用等之儀也、時々之時宜次第向寄々も助合取扱申也。

一、下水 幅六尺。

右町内西之方地先ニ有之、古來町附之方ニ土手跡地を相隔、右土手附キ通
り本所菊川町裏通に相流せし下水ニ多、年代不知古來と菊川と申小川跡之
由前々々申傳、既ニ北續と本所菊川町と相唱、壹丁目々四丁目迄有之、右町屋
之裏通之方ニ多と、里俗菊川下水と相唱罷在也。然ル處享和三百年中本所深
川道御普請之節、前書土手跡地所當町北之方横町迄之間、町屋東付に新規御
掘替被下井横町南側家前々東之方横川に折廻し落口坑有來也を御埋立被
成、往來横切同横町北側町屋西之方土手外下水筋に水行御堀割、石橋御掛渡
被下也。

一、石橋 長四尺幅四間餘、御入用橋ニ御座也。

右町内西側横町往來横切下水ニ掛渡有之、起立始末と前書下水之廉ニ申上

也。

一、御預り地 長五拾三間幅平均三間半、此坪百八拾貳坪。

右當町西之方地先ニ有之、萬治年中御築立有之也、土手跡之由ニ多、幅三間程
之敷地有來、右土手西付ニ古來小川跡下水有之、菊川と唱也、由申傳、右土手跡
地所々向々ニ多、左右之武家方町方に圍込有之、年來之儀ニ多、子細相知不申
也、處、享和三百年中本所深川道御普請之節、前書ニ申上、通右土手跡西付ニ
有來、下水路東之方に幅六尺通ニ御掘替有之也、節、右土手跡地所と元祿十
三辰年八月中御普請方御役所々當所に御預ヶ被成、證文差上有之旨被仰渡、
文化五辰年十月中御同所々御調之上、同年十二月中當時圍込有來也、儘向々
御預替ニ相成、右横町北之方町屋地先六拾三坪南之方ニ多、六拾坪當所に御
預ヶ被成、猶又其後南之方武家方續六間堀村酒井左衛門尉様御抱屋敷地先
百八拾貳坪之場所、御同人様と御預地之分、翌巳年十月中村方に御讓渡ニ相
成也、節、名主八左衛門に御預替ニ相成申也。然ル處、右横町北之方地先之分幅
三間長拾八間、此坪六拾三坪之場所、同七年九月六日御普請方同心木暮龜
七殿に拜領地ニ相渡、猶又右地所々往來を隔、南之方幅三間ニ貳拾間、此坪六

拾坪之分を、文化十三年七月、中御代官江川太郎左衛門様御手附新見健次

郎殿の拜領地に相渡、當時百八拾貳坪之場所、當所御預り地に御座り。

一、反別之儀を、當町分壹丁四反七畝八歩之場所ニ御座り。

但、惣名六間堀惣反別之内ニ御座り。

一、御檢地并領名兩御支配等之儀を、同所六間堀町を申上り通御座り。

——文政町方書上

深川東町

深川東町 假ニ此ニ附記ス。

深川東町

一、當町之儀も武州葛飾郡西葛西領深川町分郷六間堀高之内ニあり、古來伊奈半左衛門様御代官所ニ有之、起立年代町並屋敷ニ相成り、譯等、委細同所深川町を申上り通御座り。町名起り之儀を、當町西後之川を横川と相唱、右横川東付ニ有之町屋ニ付、東町と町名ニ仕り、儀ニ可有之、則當町川向ニ有之町屋と西町と相唱申り。尤舊記申傳等と無御座り。

一、大横川 幅貳拾間。

右町内西裏通地先を相流、上を横川と相唱、當町北之方本所菊川町之方々南

に小名木川に流行申り。尤北を豎川南を小名木川に續け、横川ニ付、川名ニ相唱り、由申傳、御堀割之年月等之儀を相知不申り。

一、物揚場 幅三間

右町内横町地先ニ有之、當所并最寄物揚場ニあり、當町持場ニ御座り。

一、反別之儀を、當町分壹丁貳反拾八歩之場所ニ御座り。

但、惣名六間堀惣反別之内ニ御座り。

一、御檢地領名之儀并兩御支配等之分柄之儀、同所六間堀町を申上り通ニ御座り。

——文政町方書上

深川三間町

深川三間町 假ニ此ニ附記ス。

深川三間町

一、右町起立之儀、古を武州葛飾郡西葛西領深川村之内ニあり、委細元町を申上り通御座り。右町之儀を往古人家も稀ニあり、起立之砌三軒ふりて八人家も無之、右を唱へ來り、由ニあり三間町と相唱來、正徳三巳年五月丹羽遠江守様松野壹岐守様坪内能登守様御勤役之節、町方兩御支配ニ相成、町並屋敷ニ御座り。尤町内南側地所之内、間口五間七寸と八左衛門支配ニ付、兩名ニあり書上申

市街恢弘時代

一、町内里俗當町東之方地尻五間堀を瓢單堀と相唱申○中略。
 一、反別之儀と、深川惣高五百九拾六石三斗六合壹勺六才、此反別五拾四町七反三畝九步半之内、當町分高八石九斗九升六合此反別七反四畝貳拾九步二御座ハ。

——文政町方書上

深川古元町 元町ノ地町家ト成ニ先チテ町家タリシト云ヘハ、寛文初年前ノ市街ナルヤ知ル可シ。假ニ此ニ附載ス。

深川古元町

一、當町之儀と、武州葛飾郡西葛西領深川町分郷六間堀惣高之内ニ多、古來伊奈半左衛門様御代官所ニ有之、起立年代町並屋敷ニ相成ハ分柄等、委細深川町々申上ハ通御座ハ。且又町名起之儀と、百姓家追々町場ニ相成ハ頃、村内當時之元町ハ唱ハ町名出來ハ間、當所と古元町ハ唱ハ趣ニ有之、右と當時元町之場所町屋ニ相成ハ以前々百姓町屋ニ相成罷在ハ故、右體町名ニ仕ハ哉、舊記と勿論ハ申傳ハ儀無之、委細と相知不申ハ。

一、豎川 幅貳拾間餘。

右町内北側後地先を東之方逆井口々西ハ同所南松代町之方ハ相流、川名之起り御堀割年代等舊記申傳も無之相知不申ハ。

一、舟渡場 幅七間半。

内

御上り場 幅貳間。

右町内北側西際ニ有之、當町并向合龜戸村々北ハ川向本所中ノ郷五ノ橋町并龜戸村ハ之舟渡場ニ多、里俗五ツ目渡又と羅漢渡ハ相唱、前書龜戸村持場ニ有之、右往古と五ノ橋ハ申橋有之、天和之頃御取拂ニ相成ハ跡、百姓太郎兵衛ハ申者往來之者相對ニ多、舟渡致罷在、享保四亥年之頃御成之節舟渡ニ多御用辨仕ハニ付、同五子年之頃御代官伊奈半左衛門様々舟渡仕ハ始末御尋有之、寄特之事ニ御聞受、言之字御極印無年貢渡舟御免被成ハ由、同十巳年中羅漢寺入佛有之以來、渡舟家業ニ相成ハ様罷成ハ趣ニ有之、當時渡守庄五郎ハ申、起立人太郎兵衛跡相續罷在ハ由ニ御座ハ。

一、町御奉行所、御代官所兩御支配ニ多、當時山田茂左衛門様御代官所ニ御座

ハ。

市街恢弘時代

一、葛飾郡西葛西領之内ニ多、深川村一體之高内分郷仕ハ場所ニ多、惣名六間堀ヲ相唱反別一體ニ御座シ。

一、反別之儀ヲ當町分五反貳拾七步之場所ニ御座シ。

但、惣名六間堀惣反別貳拾丁五反拾貳步半之内ニ御座シ。

一、御檢地之儀ニ、深川町一體ニ多、元祿八亥年酒井河内守様、享保十七子年寛播磨守様御檢地ニ御座シ。

——文政町方書上

〔附記、一〕 時鐘

附記、一
時鐘

本所ニ時鐘ヲ設クル、創始ノ年月ヲ知ラズ。士宅商鋪ヲ開クノ前後ナル可キハ、之ヲ推スルニ難カラズ。姑ク此ニ附記スト云フ。

覺

一、本所時鐘、往古々有來申候。場所之義ハ横川通中之橋向ニ時鐘建相勤、萬民之御重寶ニ罷成候。凡五十年程以前本所ニ御引拂ニ相成候時鐘中絶仕候。其節之請負人他之者ニ御座候。依之委細書留等私共方ニ無御坐候。私共親代々承傳罷在候。其以後本所御取立ニ付、時鐘無御坐萬民不自由ニ付、私共親代御願申上、御請負被爲仰付候御更。

一、私共時鐘御請負之義、三十八年以前、元祿元年辰年本所御取立ニ付、御武家様方并寺社方町方其外萬民爲御重寶之時鐘御願申上候。其節町御奉行所様北條安房守^平。様申斐庄飛驒守^親。様御兩御奉行所様御前ニ御願申上候處、被爲聽召、譯段々御吟味之上、元祿二年巳五月廿二日御式日阿部豊後守様御出坐之節、御評定所ニ被爲召出被爲仰付候。依之時鐘相勤申候、役人扶持方爲切米鐘樓錢御武家様方寺社方町方共御相談を以申請候處、不被下^下御方も御坐候多難義仕候ニ付、右御兩御奉行所様御前ニ願上候處、元祿五年申九月御證文御帳面被爲仰付、御武家様方ハ御高割厘毛之御割符段々十九通、寺社方町方ハ小間一軒ニ付三錢掛り御割符御證文、御評定所ニおゐて惣御奉行様御列坐、御印形被爲成下難有奉存、鐘錢一ケ年ニ一度ツ、申請、永々迄無懈怠相勤可申段御請負爲仰付、頂戴仕罷在御更。

一、鐘樓錢申請候場所之傍示、西ハ兩國橋川通り、北ハ牛島源兵衛橋川通り、東ハ天神裏川通り六ツ目通り迄、南ハ深川元御番所々深川河岸西向六ツ目通り迄。此内御武家様方并寺社町方共、鐘樓錢一ケ年ニ一度ツ、年々ニ申請、晝夜無懈怠相勤申候更。

一時鐘堂屋敷本所三之橋横川通ニ多御拜領被爲仰付、則表ニ町並京間八間裏行町並二十間御拜領、鐘樓堂相建、兩人共ニ居宅仕罷在候。尤其砌鐘鑄立、鐘樓堂相建候共ニ私共入用金を以仕立申候。右之段々相違無御坐候。以上。

享保十巳年六月

本所時鐘御請負
甚右衛門
同
長右衛門

右本石町時鐘并本所時鐘由緒不相知候ニ付、享保十年巳六月奈良屋市右衛門ニ相尋候處書面之趣之よし銘々書付出し候ニ付、相記置。

本所鐘樓堂建候義ニ付申上候書付

評定所一坐

本所入江町鐘樓堂當正月晦日火災ニ類燒致候ニ付、前々之通建申度旨時鐘請負人甚右衛門長右衛門相願候付、吟味仕候處、元祿十五年正徳二辰年鐘樓堂燒失之節入札爲致、伺之上本所深川武家寺社町方ニ出銀割付、右割付帳ニ評定一坐致印形、請負人共ニ相渡、請負人相廻り、出銀請取候多建申候。今度ハ土藏作りニ相建度旨申ニ付、入札爲致候處、金七十七兩二分落札ニ多御坐候。先例之通右割付帳ニ評定一坐致印形、請負人共ニ相渡建候様

ニ可仕候哉、奉伺候。以上。

伺之通可申旨被仰渡、奉畏候。以上。

未三月五日

評定所一坐

右書上出銀割付之書付差添、未三月五日松平伊賀守殿ニ上ル。即日伺之通可申旨被仰渡、承書認上ル。但出銀割付之書付ハ上ルニ不及由ニ多御返シ、右爲控美濃守々同六日内寄合候節被差越候。——享保撰要類集
入江町○本所

時鐘屋鋪表口町並京間八間。表行町並貳拾間。 壹町目江町○入の中などにあり。長右衛門○甚ノ誤歟。勘右衛門

門と云貳人の持して、本所中へ時を報ずるたを建とむたる屋敷あり。鐘ハ虎口の周回九尺五寸、厚三寸壹分、長四尺餘あり。無銘ふれど鑄造此年月を志す。按よ寛文十一年の圖よ此鐘樓横川の東岸昔田付四郎兵衛組屋敷をおうれし側よあり。又延寶八年の圖よハ法恩寺橋西乃北角よ有。然と最初ハ横川乃東よ有しを、後法恩寺橋の西よ移され、再び今の地へ轉どかむたるとも。又天和中本所上地帳よ、横川貳拾間道北角、時の鐘役中村源兵衛が拜借地貳百坪、同河岸五十坪、外拜借地三百八拾貳坪五合、三ヶ

所共天和三年御用地より上りしと有。是延寶圖よりえとる地ふるべし。此後ハまどく止られしを、元祿元年今乃長右衛門勘右衛門等が先祖の願ひ上て再び當地を賜はり、鐘樓を建立せといへり。略。中又此撞鐘造營等此時、武家寺社及び町方より出銀せる事ハ、公より此御ゆるしふと、因よその割付を左より出せり。

本所鐘樓堂建出銀割付之覺

評定所一座

金七拾七兩貳分 兩替六拾匁。

此銀四貫六百五拾匁 拾二割

内九ツ分

武家方。

此銀四貫百八拾五匁。

内壹ツ分

寺社方御代官

此銀四百六拾五匁。

知行惣高

四百五拾四萬四千八百七拾石

俵高

九千拾四俵

惣小間數

七千九百五拾六間

寺社方町方御代官附之町々。

右之割

一、拾俵 九拾 俵迄 拾俵二付四錢懸り。
但、下屋敷と上屋敷半分之割。

一、百石 千石迄 百石二付三分五厘懸り。

一、千石 千五百石迄 百石二付三分三厘懸り。

一、千六百石 貳千貳百石迄 百石二付三分貳厘懸り。

一、貳千三百石 三千石迄 百石二付三分壹厘懸り。

一、三千石 四千石迄 百石二付貳分八厘五毛懸り。

一、四千石 五千石迄 百石二付貳分七厘懸り。

一、五千石 七千石迄 百石二付貳分四厘四毛懸り。

一、七千石 九千九百石迄 百石二付貳分三厘五毛懸り。

一、壹萬石 貳萬三千石迄 百石二付貳分一厘五毛懸り。

一、貳萬三千石 三萬五千石迄 百石二付貳分五毛懸り。

一、三萬五千石 五萬石迄 百石二付壹分八厘五毛懸り。

一、五萬石 七萬石迄 百石二付一分四厘五毛懸り。

一、七萬石 拾萬石迄 百石二付一分四厘五毛懸り。

一、拾萬石 貳拾萬石迄 百石二付壹分三厘懸り。

一、貳拾萬石 貳拾五萬石迄 百石二付壹分五毛懸り。

- 一、貳拾五萬百石々三拾萬石迄 百石ニ付壹分懸り。
- 一、三拾萬百石々四十九萬石迄 百石ニ付九厘懸り。
- 一、五拾萬石々七拾萬石迄 百石ニ付七り五毛懸り。
- 寺社方町方御代官附之町々
- 一、寺社方 小間壹間ニ付 三錢懸り。
- 一、町方 小間壹間ニ付 三錢懸り。
- 一、御代官附之小間壹間ニ付 三錢懸り。
- 以上。

未二月

——葛西志

附記、二
龜戶錢座

〔附記、二〕 龜戶錢座

元祿中ノ設置ト爲ス者有リ。葛西志ハ、萬治年間ナル可シト傳フ。其他説有リ。吹塵録左ノ如ク記スヲ觀レバ、寛文元年己ニ錢座有リタルハ明カ也。便宜上此ニ收録ス。

手覺之儘奉入御覽ハ書付

- 一、寛文元丑年、龜戶ニ於テ吳服所之内重立ハ者六人、鑄錢引請、拾三箇年間、文錢吹立有之。

一、元祿十四年年紀伊國屋文右衛門鑄錢引請、寶永通寶裏ニ、世用永久之文字有之。拾文之大錢、龜戶前同所ニ於テ吹立有之。又寶永五子年丸屋三郎左衛門、樋口善兵衛引請、鑄錢有之。

一、正徳四年、龜戶同所ニ於テ、吳服所六人之者引請、鑄錢有之。

一、享保年中、深川拾萬坪鑄錢有之。同年大坂井仙臺南部ニ、亦も鑄錢有之。由引請ハもの不相知。

一、元文中、左之通鑄錢有之。

龜戶 三木彦右衛門。

拾萬坪 井筒屋五郎左衛門、橋本平七、千田庄兵衛、丹波屋五郎兵衛。

小梅 野島屋、南部屋、但名不相知。

三十三間堂 鼠屋、但、同斷。

京都地所不
相知。 長島屋忠七。

野州足尾 橋本平七、千田庄兵衛、丹波屋五郎兵衛。

大坂高津
浦口。 紀州。秋田。日光。甲州。佐州。

但、此分引請等不相知。

右之通御座ハ以上。

申五月

後藤庄三郎役人
山本運八郎

龜戸村○武藏國東葛飾郡○中略。

錢座蹟 今段別四町六段四畝三步ノ地ヲ云。當時鑄錢所ノ構トナリシ限リハ詳カナラズ。此錢座ハ昔芝網繩手ニアリ。其頃ハ鳴海平藏ト云者司シニ、後年爰へ移サレテヨリ、後藤庄三郎カ持トナレリト。當所ニ於テ鑄錢セシ始ハ、元祿頃ヨリノ事ナリト云傳フ。古今泉貨鑑ト云書ニ、龜戸村ニテ鑄錢アリシハ元祿十年ヨリ寶永元年マデ、又同五年ヨリ正徳二年マテ、同四年ヨリ享保三年マデ、元文三年明和二年同五年ト載セタレド、夫ヨリ前寛文十一年梓行ノ江戸圖ニ、當所ニ錢座ト書タレハ、元祿以後ニ始リシト云ハ誤レリ。廢セラレシハ安永二年ト云。其蹟今ハ鶴ノ御鷹場ノ堀及ヒ加藤遠江守カ抱屋敷等ニナレリ。

——新編武藏風土記稿

龜戸村○中略。

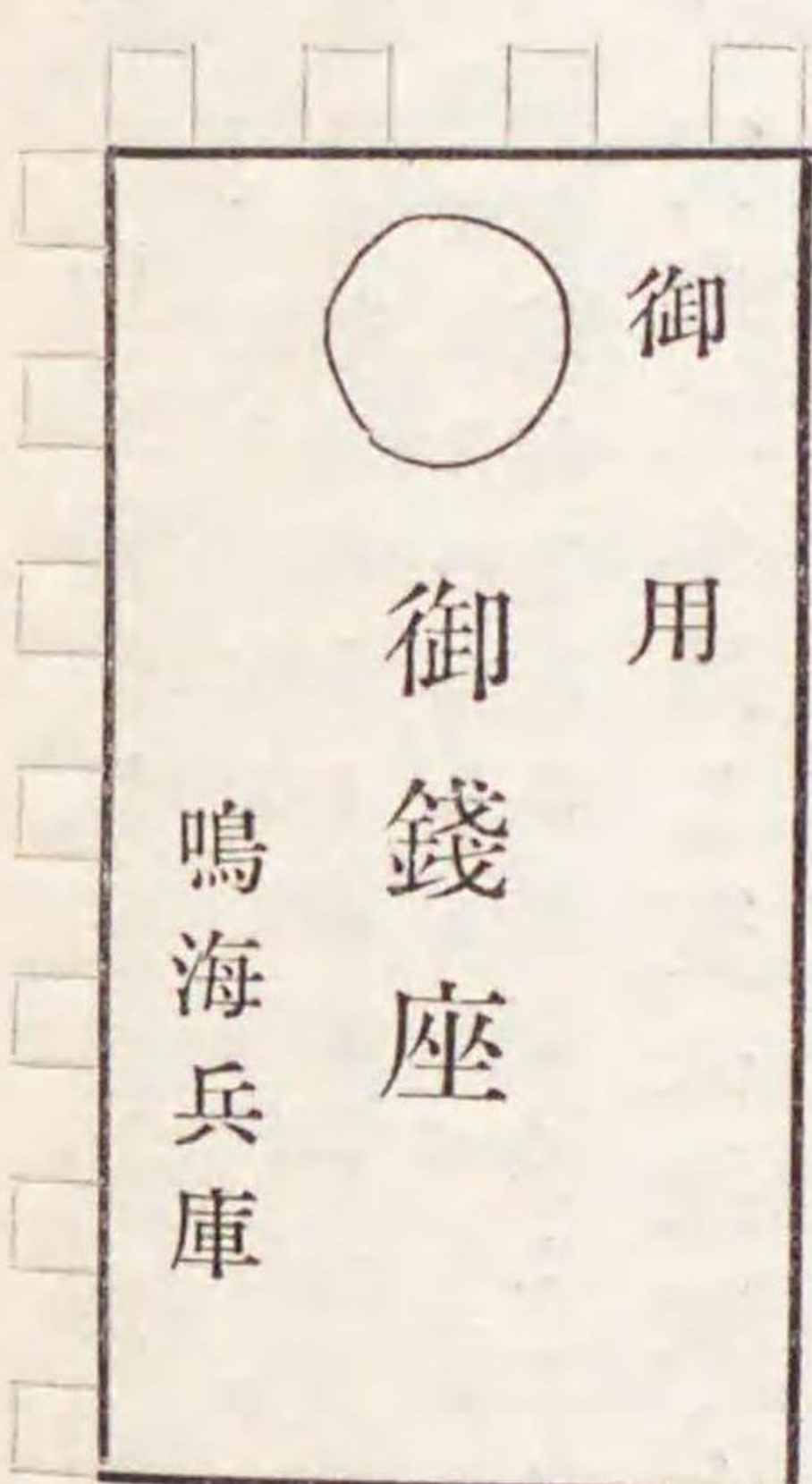
一、新錢座跡

右老町内横十間川通町屋東裏ニ有之、反別四町九反六畝拾三步有之、古來

兩度吹所ニ相成、後藤庄三郎方ニ龜戸村惣百姓カ賣渡、新錢吹立ハ場所ニ有、其後年代不知村方ニ買戻ニ相成。尤書留等々無之、猶又明和之始年月不知御代官伊奈半左衛門様御懸ニ有、地所御取調、百姓方カ後藤庄三郎ニ再ヒ賣渡、一圓之葭生場地形仕、明和年中吹方被仰付、當時通用之ずク錢カ唱ハ錢ニ有、毎月江戸町中兩替屋共組ニ舟印幟相建、新錢買請ニ來、其節カ當町内右鑄立ニ掛リハ者、他國よりも多分入込住居、御用中カ所之潤ハニも罷成ハ由、明和之末ニ至、吹方御差止ニ相成、安永始之頃迄表門并大吹カ唱ハ大造成吹所、且役人詰所等相残り、安永五年之頃取拂、其後來葭生場ニ有、後藤庄三郎持ニ御座ハ處、文化五辰年三月中願濟之上、當町家持孫兵衛引請ニ相成、七ヶ年之間開發被仰付、高不覺地代、人之御代官菅沼安十郎様御役所ハ上納、孫兵衛進退仕、同十五寅年十二月中開發中ニ有、孫兵衛カ加藤遠江守様ハ御讓申上、御同人様御抱屋敷ニ御取立、屋敷御年貢ニ相直リ、當時御同人様御所持ニ御座ハ。先年カ錢座跡カ唱來、東西百貳拾九間半、南北百拾五間、反別四町九反六畝拾三步、村中百姓持、右之内三町九反八畝拾八步御抱屋敷ニ相成、殘九反七畝貳拾五步惣百姓持ニ有、今以葭生場ニ有、

びこきをゆるされ僅し九ヶ年を歴て、安永二年終し錢座を廢せられ、その跡七反餘の地ハ、鶴の御鷹場ニ定免られ餘ハとくく水田ニふしかへされしと。又古今泉貨鑑ニ據せハ、葛西領の地ニ於て鑄錢有しハ、當所のこよ何らび。享保十一年より同十七年迄、深川十萬坪ニ於て鑄し、元文元年より同所ニ於て鑄せり。卷の錢の背上ハ十の字を印せ、又元文元年小梅と猿江ニ於て鑄し、同二年小名木川ニ於て鑄せ。此背上ハ川の字を印し、小梅ニ於て鑄せしハ小の字を印せりと云。又同四年深川平野新田平野新田ニ於て鑄るべし。及押上村ニ於て鑄せといへり。されど何れの處もわづらう數年ふらざして止られしふれど、今其舊地ハ詳し知がとし。略。中。

鳴海の子孫ハ今東葛西領平井村ニ住せる春米屋源右衛門と云もの、家ニ客居せり。鑄錢の事ニ與りし時の旗ふりとして所持せるもの左のとし。



葛西志

武藏通志ニハ左ノ如ク見ユ。

龜戶鑄錢座址 龜戶村字水神ニアリ。面積壹萬三千九百貳拾三坪。舊芝網繩手ニアリ。寛永十四年丁丑今ノ地ニ移シ、正保二年乙酉六月之ヲ廢シ、復タ用地トナス。寛文十一年辛亥梓行江戸繪圖之ヲ載ス。元祿ノ初ヨリ明和五年戊子ノ頃ニ至ルマテ此地ニ鑄造ス。古今泉貨鑑。安永二年癸巳之ヲ廢シ、後鶴飼養場及加藤氏別邸トナリ、明治以後民有地ニ屬シ、今宅地田圃タリ。

〔參考〕 武江年表ニ、

今年三〇寛文より天和三年に至つて、龜戶村に錢を鑄さしめたる。平安方廣寺の銅佛
を毀ちて鑄る所と云。俗に耳白といふ。其後度々龜戶にて鑄錢あり。梅翁句集、江戸本所新錢座にて、すし風や吹出す天下一貫文。
 九月廿三日二〇寛文 小荷駄馬口付の者乗るへかゝさる旨、江戸端々へ定抗建つ。

廿一日己巳

〇寛文元年(紀元二三二一年)五月。〇己巳、三正綜覽。本所築地奉行ニ命シ、本所〇市内本所區。

ニ於ケル勘定方所給低汚地ヲ填築セシム。

〇柳營日記。嚴有院殿御實紀。

本所低汚地填築 ハ柳營日記ニ、

廿一日〇寛文元年五月。〇中略。

市街恢弘時代

本所低汚地填築

事蹟

一、淺草於御材木藏最前御勘定衆に被下屋鋪地窪ニ付、築立被下以様ニ奉願之。達御聽之處、築立被下之旨被仰出之。

御勘定奉行衆に豐後守傳之。右之旨本庄築地奉行山崎四郎左衛門政○重、徳山五兵衛政○重に申渡之地窪無之様可築立之旨彼奉行に豐後守傳之。

ト載セ、嚴有院殿御實紀ハ左ノ如ク記ス。

廿一日○寛文元年。本所邊御家人宅地修築の事を本所奉行に命ぜらる。

廿三日辛未○寛文元年。屋鋪替有リ。廿四日壬申○寛文元年。

廿五日癸酉○寛文元年。廿六日甲戌○寛文元年。

及六月五日癸未○寛文元年。六日甲申○寛文元年。

亦同シ。内、本所○市内ニ給與セラレタル者少ナカラズ。○柳營日記。

記、寛政呈請。

屋鋪替 左ノ屋鋪替有リ。

廿三日○寛文元年。

一、加々爪甲斐守○直。

右被下屋敷、増上寺近所ニ有差上之爲替地、於麻布之内三田被下之。

關氏盛

一、關兵部少輔○氏盛。上屋敷、當春差上之爲替地、淺草觀音堂之後被下之。右兩條老中傳之。

廿四日○寛文元年。

小出大隅守○棟。

右下屋敷麻布ニ有之處、地狹ニ付差上之、縱雖爲遠方、少々坪數拜領仕度由、連

願之趣及上聽之處、願之通於麻布岡田豐前守下屋敷隣被下之旨、小出越中

守二男瀬兵衛招之、雅樂頭傳達之。○但、大隅守と先頃御暇ニ付あり。

岡野長十郎○成。

於赤坂築地屋敷被下、然共手前惡敷ニ付、於小日向拜領仕度之旨、内々訴之。及

上聞、願之通引替被下以旨、豐後守傳之。

廿五日○寛文元年。

酒井長門守○重。

右屋敷やよすろし御用地ニ付、去ル頃被召上之、其爲替地於本庄千六百坪被

下之旨、松平内膳に豐後守傳之。

廿六日○寛文元年。

市街恢弘時代

屋鋪替

屋鋪替事蹟

加々爪直

小出有棟

岡野成常

酒井忠重

秋山正房

高久保忠

三浦義武
富士信成
竹尾俊方
野間正信
戸田氏經
大森好輝
佐々長盛
阿部勝成

加藤泰興
土井利直
北條氏利
興力

東京市史稿

秋山十右衛門正房

右去ル頃屋敷御用地ニ付差上之爲其替地關兵部少輔上ケ屋敷被下之。

大久保市十郎高忠

右屋敷御用地ニ付差上之其替地雖被下右之替地坪數狹ニ付爲其替於本庄被下之。但六百坪。

一、屋鋪替願之通達上聞勝手次第可替之旨被仰出之。

御留守居支配
三浦五郎左衛門武義
御鷹匠清水權之助組
野間市之助信成
富土市左衛門信成
御鷹匠宮藤太郎組
大森半七郎輝好
青山丹後守組
戸田淡路守經氏
松平伯耆守組
佐々權四郎盛長
阿部勘左衛門勝成

右之半七郎屋敷淡路守移り權四郎屋敷之半七郎移り勘左衛門屋敷之内三分二之權四郎移り勘左衛門を爲其代淡路守近所之町屋敷請取旨也。

加藤出羽守興泰
土井信濃守直利
北條右近大夫氏利
興力

牧野正重

牧野金助正重

之者

右之出羽守上屋敷を替北條右近大夫與力屋敷出羽守下屋敷之近所ニ付相望下屋敷添之彼與力を牧野金助支配之者屋敷之相越金助支配之者之出羽守方之被遣之右近大夫與力屋敷之殘地之相移ル之。

五日寛文元年六月中略御屋鋪被下之旨被仰出之。

本庄町並表廿間口。岡野右同所表廿間口。矢橋八丁堀薪藏之脇同斷川崎本庄町並表十間口。日井本庄町並表十間口。各去ゆ不うめう去也。ゆう去ん日

右之通女中方之被下之旨本多美濃守作カ伊澤隼人正北條右近大夫渡邊丹後守之被相達之。

六日寛文元年六月中略。

一、屋敷望之面々被下之。

本庄ニある千二百坪。是ハ雅樂頭傳之。
西窪寺院之跡。六百七十坪餘。
市街恢弘時代

松平修理長重
伊勢兵庫貞衛

一一六七

女中

松平重長
伊勢貞衛

谷中。是て本庄之屋鋪御堀被_レ成_レ付_ル之。

本書所付ふし。

赤坂築地岡野長十郎元屋鋪五百坪。

良以隣空地四百坪。

上同斷三百七拾六坪。

八丁堀御蔭藏脇五百三十八坪。

清水寺元屋敷内三百俵(○坪カ)内。

本庄町並十間口宛。

上同表廿間口。

同斷表廿間口。

宗 悅

壽 命 院

内 田 玄 勝

成 芳 院

重 元

久志本内藏允_○常元。

了 伯

連歌師

玄 昌 祥 程

後 藤 程 乘

茶 屋 長 意

——柳營日次記

貞衡_○始貞輝。幼名清十郎。三郎。兵庫。

寬文元年丑年六月六日、西ノ久保飯倉町二丁目寺地之跡四百八拾坪拜領。千里_○玄勝。藥樹院。大藏卿法印。

寬文元辛丑年六月六日、赤坂築地岡野長十郎上ケ屋敷五百坪拜領仕_レ。

——寬政呈譜

是月_○寬文元年(紀元)五月。神田川擴鑿功成ルヲ以テ、溝渠其他ニ關スル

令達有リ。_○大成令。嚴有院殿御實紀。

溝渠其他令達 左ノ如シ。

寬文元年丑年五月

覺

一、牛込土橋_ノ筋違橋迄水敲已下不損やうふ常々可念入之旨其近邊屋敷主_ノ急度可被_レ申渡事。

一、下水道其近邊之面々、月番役_ノ致切々浚_レ様ニ可被_レ申渡事。

一、御堀_ノちり_ノひく_ノ多不捨様ニ、御堀近邊之面々_ノ急度可被_レ申渡_レ事。

以上。五月 日_○寬文元年。

寬文元辛丑年五月

覺

一、牛込土橋_ノ筋違橋迄、土手并御堀、其近邊之屋主_ノ割渡之植木之手入いた市街恢弘時代

溝渠其他令達

達事蹟其他令

宗 悅

壽 命 院

内 田 玄 勝

成 芳 院

重 元

久志本常元

了 伯

玄 昌 祥 程

後 藤 程 乘

茶 屋 長 意

し草をもちらせ可申事。
一、御用なくして土手はかり、又往行不仕様ふ其近邊之屋敷主に可被申渡之事。

一、御堀のちりあくた不捨やうふ、御堀近邊之面にて急度可被相觸事。
以上。 — 大成令〇教令類纂同。

此月〇寛文元年五月令せらるゝは、牛込より筋違橋迄水敵已下損壞せざるやう、常にこゝろを用ゆへきむね、そのほとり宅地ある輩に令すべし、下水道は月番を定め、時々浚はしむべし、城溝に塵芥捨しめざるやう、是も令すべしとあり。又令せらるゝは、同所堤溝ともに、その邊宅地あるものに分散し、堤上の樹木を培養し、草をもちりとらしむへし、事ふきに堤にのぼり、あるはゆきせしむへからずとあり。
— 嚴有院殿御實紀

六月朔日己卯〇寛文元年紀元二二二〇己卯三月三正綜覽。婢僕雇用取締ニ關スル布令有〇大成令。

婢僕雇用取締事蹟

寛文元丑年六月朔日

男女召仕之者抱置〇或丑二月二日より寅二月二日迄日切之請狀致させ抱〇い處翌年も又抱〇い約束ふて日限之外差置請狀未取直内ニ取逃致脱落〇い輩、主人より右之請人ニ懸り儀、理不盡ニ間、左様之出入訴〇いハ、必主人失墜ニ可被仰付之旨、御奉行所〇ふて御定〇い。在々ニ至迄、其旨相守、急度請狀取直之、召抱可申〇い。年季ニ置〇いをも同前ニ〇い。但し質物ニ差置、返金不濟故、日切之外抱〇いをの致欠落〇いハ、可爲格別〇い。右之旨跡々より被仰付〇いへとも、猥ニ間、自今以後、堅可相守、由被仰出〇い。以上。

深川番所轉

深川番所轉移事蹟

六日甲申〇寛文元年紀元二二二一年六月〇甲申三月三正綜覽。本所新渠〇市内本所區。成ルヲ以テ深川口番所〇市内深川區。ヲ中川口〇武藏國南葛飾郡。ニ移ス。〇柳營日記。嚴有院殿御實紀。深川番所轉移、左ノ如ク傳フ、蓋豎川ノ鑿開成〇ル也。

六日〇寛文元年六月〇中略。

一、唯今迄有來深川口人改之御番所、今度本所新堀出來ニ付、中川口〇御番所引移〇い間、於彼所、如最前御番可相勤之旨、先番之面々水野圖書高木〇勘左衛門〇正・山口勘兵衛〇直、被相傳之。

市街恢弘時代

十三日○寛文元年九月略。今度深川番所中川江迂りゆ二付、

内藤三之介○忠吉

今村傳四郎○三正成

右本庄之末中川御番所詰被仰付ゆ間、只今迄之役人、

中川御番

水野甲斐守○忠保

山口勘兵衛○直堅

高木甚左衛門○正則

右内藤三之助今村傳四郎申合勤番可仕旨、老中演達之。

——柳營日次記

六日○寛文元年六月。本所新渠成功により、深川の番所を移して、中川口に建らる。

十三日○寛文元年九月略。こたひ深川番所を中川に引移さるゝにより、寄合内藤三

之助忠吉今村傳三郎正成其番を仰付られ、深川番水野甲斐守忠保山口勘兵衛直堅高木甚左衛門正則も同じく勤番すへしと仰付らる。

——嚴有院殿御實紀

附記 街路取締

覺

〔附記〕 街路取締

一、跡々度々如申付候、辻鞠辻相撲、辻立、堅仕間敷候、若相背辻立辻鞠辻相撲、喧嘩口論仕出し候ハ、當人々不及申、其所之家主急度可申付候間、左様相心得可申候。附方々廣小路ニ萬商賣物、自今以後堅置申間鋪候。猥ニ於違背仕々、是又急度曲事ニ可申付事。

右左丑○寛文元年六月九日御觸町中連判。

——撰要永久録○町觸同

六月十二日庚寅○寛文元年紀元二二二富山○越中國城主前田利次○松平淡路守

其他邸地ヲ賜ヒ、廿三日辛丑○寛文元年紀元二二二二八、高崎○上野國城主安藤重博○對馬守賜邸ス。○柳營日次記。寛政呈請。

賜邸 柳營日次記ニ據レハ、

十二日○寛文元年六月略。

一、屋敷被下之面々、

一、淺草本多能登守下

一、屋敷近所百間四方。

一、谷中近所根津之

一、宮並ニ九十間四方。

一、八丁堀法恩寺之跡不殘。

一、海手森内記屋敷

一、之裏七拾間四方。

市街恢弘時代

松平淡路守○前田利次

松平飛驒守○前田利明

田村右京亮○宗良

關但馬守○長政

賜邸

賜邸事蹟

前田利次

前田利明

田村宗良

關長政

京極高勝

一、三田加々爪甲斐守屋敷

京極信濃守勝。高

五島盛清

一、木挽町築地之

五島民部清。盛

松平定知

一、同所二十間ニ三十間。

能登守子
松平吉五郎知。定

酒井重知

一、麻布小出大隅守上屋敷。

酒井權兵衛重知。重

大友義孝

一、田安内猪飼半左衛門裏明屋敷。

大友内藏介義孝。義

曾我包助

一、吉祥寺元屋敷之内三十間ニ四十間。伊賀守只今迄屋敷ハ忒權之丞ニ被下之。

曾我伊賀守包助。包

右之通老中傳之。

廿三日寛文元年六月。

安藤重博

安藤對馬守屋敷狹ニ付、最前有馬松千代利頼上ル屋敷被下之處、是又坪數狹

ニ付、於木挽町築地七十間四方被下之。

寛政呈譜ハ、關長政ノ賜邸ヲ七月朔日ノ事トス。或ハ受命ノ日六月十二日ニシ

テ、受渡ノ日實ニ七月朔日ナルヤモ知ル可カラズ。

關備前守長政幼名次耶八。又式部、但馬守。

寛文元辛丑年七月朔、濱海手ニ多屋敷拜領仕、築地取立居住仕、當時居屋敷ニ御座シ。
——寛政呈譜

伊丹勝元

同ク木挽町築地ニ屋鋪ヲ賜ヒタル者ニ伊丹勝元有リ、賜邸ノ月日明カナラザレバ、姑ク此ニ並録ス。

勝元圖書。伊丹。

寛文元丑年木挽町築地ニ多五百坪初多屋敷拜領也。

——寛政呈譜

附記
兒童山王
參詣

〔附記〕 兒童山王參詣

申渡覺

一、頃日町中之子供、山王へ參るとて大勢寄合、夥敷祭かましき事仕、參詣致由被爲聞召、自今已後、山王ニかきゞ、何之社堂へ參ハ共、常之裝束よて參詣可仕ハ、若重多左様ニ祭ケ間敷仕、人集致ハものモ、越度ニ可被仰付ハ、間、家持モ不及申、借屋店借等迄、堅申渡、可相守之者也。

丑寛文元年六月廿七日。 ——正實事錄

是月寛文元年六月。 小普請奉行ノ執務規程ヲ定ム。殿有院。殿御實紀。

小普請奉行執務規程 嚴有院殿御實紀ヲ抄出ス。

此月寛文元年六月。 小普請奉行に條約を下さる。さきよりさだめらるし手代

并に十二組觸頭以下之徒等奉行小屋場に出るとき、交代の時刻下々迄みだ

市街恢弘時代

小普請奉行
執務規程
小普請奉行
執務規程
蹟

りならざるやう、かたく令すべし、新築はいふ迄もふし、修理のさまも造作の上中下にまたがひ、よく査檢し、材木を用る事、その所々にかなへる材を考へ、常に書て呈すべし、おもて向のほかは節ある木を用ひ、松栴その他雜木にて、も苦しからざる處には、みだりに檜を用べからず、すべて材木庫に收貯せしは、うけとり用べし、もしいさゝか寸間たがへるとも、久しくたくはへ置ば腐朽してつゐに用に堪ざるに至れば、相議して用べし、敷居鴨居その他短くきり又はほそく挽わりて用る處へ、少しも大なる材木用べからず、檜を屋根に用る時、一坪にいくばくとかねてより定めし事なれど、葺さまにより、少しづゝのたがひ有べければ、時々葺こゝろみしめ、その前にかなへるを考へ、よくふきさまを査檢すべし、井筒もおふじく心得べし、釘鎖その外鐵物うけとる時、はじめ命ぜし寸尺にたがはざるやうに査檢すべし、用べき所々及ひ員數をことさら點檢すべし、すべて漆物は庫の漆を用る事なれど、功なりし後には、その支用知がたかるべし、是もかねてより査檢すべし、石并に小買物は、その數おほければ、區別して、善惡品格を價に照してはからふこと肝要ふり、たとへ價廉なりとも、その品物あしきは用るにたえがたし、又龜薄にても苦し

からざるを、美麗に過て價たときは彌まかるへからず、此むね心して査檢すべし、障壁の事は、壁下地をあらく作る時は、泥土おほくつきてかはしがたし、下地よくかはかさるほど中ぬりをふし、重て上ぬりするをもて、下地の繩腐朽しやすく、すみやかに破壊に至れり、修繕も前のごとくなれば、同じく破壊すへきにより、此事こゝろ入べし、諸色入札なさしむる時、くさゝの仕方ある由なれば、わけてこゝろを入、何事によらず詳細にかきて示し、某の月日のかたにつきてうつしとるべしと、あらかじめ市井に令し、扱その日に至らば、よく寫させ、入札の期を定め、札ひらくときは、市人あきらかに知わかむやうには、からひ、落札を査檢し、さるうへにて保人以下を考覈すべし、市人等はかり合て札いるゝにより、第一より第四までも退けて、第五におとすよしふれば、ほしいまゝに退札いれざるやうに、あらかじめこゝろいるべし、入札開札のさまなどあしければ、爭論もおこり、又その奉行人をうたがふ事もあるべきにより、なるべきほど嚴に査檢すべし、木石瓦泥土その他いづれの品にて、も、府庫または他所よりとりよする事、その日に至り搬送の人夫をはかる時、遅緩えて事ゆかず、かついたづらに人夫を費すに至れば、前日より査檢して

人夫をはかり、それ／＼にわかち、其日に至り搬送溢滞なきやうになすべし、水運のものは潮候あしくては溢滞すへきにより、是も前日よりその候を考へ、人夫以下ついでざるやうにはかるべし、篠夫は所々よりつどへる事なれば、力をつくさざるさまなり、手代はいふまでもなし、下奉行杖つきのものによくさとして、をこたらしむべからず、もし委任して妨なきは、その費用をゆたかにはかりて授くべし、驅使便捷ならざれば、人夫を費すべし、傭夫を用るときは、いよ／＼査檢し、老穉かつ別に杖つきのものなど出ざるやうこゝろをつけ、人夫の餉は、工人とひとしくせしめ、營築のさまたげとならざるやう令すべし、營作の處より、竹木繩の零碎など、人夫携へ歸ることあるべし、いさ／＼かなり共、衆夫携へ出ば、大についゆべければ、よく査檢して、たとへかさねて用がたきものなりとも、少しもみだりなる事あるへからず、修繕の時、舊材をはこぶに、いよ／＼舊材みだりになるべければ、よく査檢して、かねて指揮せし所迄、紛失せざらんやう搬送せしめ、それ／＼に見はからひ、重て用ゆべし、當座不用の舊材をも貯をき、便宜を待て用べし、もし腐朽して用に堪がたきは、あぶり木に用べし、匠鋸鋸茸その他の諸工に上中下あれども、工價飯賃

ともにひとしきをもて、下工おほきよしなれば、この事工長及び肝煎によくさとすべし、されど少しの差等はあるべければ、それ／＼見はかりつかふべし、いさ／＼かも其業を學ひ得ざるもの、工人の數に入て、工價飯賃を貪る事もあるべければ、よく査檢すべし、またそのわざに力を盡さず、遊惰の工人は、當座の罰をさだめ、かつこの後小普請方へ入しめざるやうに令すべし、竹木其他何の品にても、市人等よりうけとる時、宰領のものにこゝろ入て令すべし、市井より城中にもものはこぶとき、その數たがひなからんやう、小簿にまゐり置査檢すべし、必用の事ありて、金銀米錢多く出すはさる事なれど、點檢いたらずして浮費となるは、今よりのち會計の時査檢あるべければ、同心手代等に至るまで、その事さとすべし、此條件を守りてをこたらず、常にこゝろ入べしとなり。

六郷橋改架

七月六日癸丑

○寛文元年(紀元二二三一年) ○癸丑(三正綜覽)

大番松平昌秀

○兵衛

大竹正次

○源太

ヲ奉行トシテ六郷橋

○武藏國

ヲ改架ス。二年壬寅

○寛文二年(紀元二三二二年)

二月二

至リテ成ル

○寛文遺錄。寛政重修諸家譜。嚴有院殿御實紀。

六郷橋改架

寛文遺録其他ニ、左ノ如ク見ユ。

六日○寛文元年
七月○中略。

大御番 松平五郎兵衛○昌秀

大竹源太郎○正次

右六郷橋損ハ付、掛直奉行被仰付旨、老中傳之。

寛文遺録

六日○寛文元年
七月○中略。大番松平五郎兵衛昌秀大竹源太郎正次は、六郷川架橋の奉

行命せらる。

六日○寛文元年
七月○中略。

一、大御番松平五郎兵衛大竹源太郎、六郷橋損ニ付懸直奉行被仰付ハ。

九月十六日○寛文元年

大御番加々爪甲斐守組 永井五郎左衛門○長井吉勝

右六郷橋之奉行被仰付。松平五郎兵衛死
去ニ付代リ也。

柳營日記

告成。

二月晦日○寛文二年

金貳枚、
時服三。

永井五郎左衛門

大竹源太郎

是ニ六郷橋奉行、出來ニ付ル也。

柳營日記

晦日○寛文二年、大番長井五右衛門吉勝、大竹源太郎正次、六郷川架橋成功によ

り、金時服給ふ。

嚴有院殿御實紀

昌重○傳助、傳市郎、三左衛門、五郎兵衛、貞享および今の呈譜昌秀につくる。

寛文元年七月六日六郷橋造りかへの奉行を承る。九月十一日死す。年五十。

正成○權之助、源太郎、今の呈譜正次に作る。

二年○寛文、二月晦日さきに六郷橋の普請を奉行せしにより、時服三領黄金

三枚をたまふ。

吉勝○金彌、七郎右衛門、五右衛門、長井。

寛文二年二月晦日、先に六郷橋修理のことを奉行せしにより、時服二領黄

金二枚をたまふ。

寛政重修諸家譜

廿七日甲戌○寛文元年
七月○甲戌、三正綜覽。

其他屋鋪ヲ賜フ者有リ。○寛文遺録、柳營日記、寛政呈譜、子爵阿部家回答。

小田原○相模國。

城主稻葉正則○美濃守。

濃守。

稻葉正則等
賜邸事蹟

廿七日○寛文元年
七月○中略。

市街恢弘時代

稻葉美濃守正則

右本庄ニる屋敷被下。

阿部播磨守正能

右小石川之屋敷ヲ上ル。爲替地阿部豊後守忠秋下屋敷隣明地被下之。

——柳營日記

稻葉正則

寛政呈譜稻葉丹後守正謀書上ニ據レバ、

正則從四位下侍從。美濃守。隱居名泰應。幼名鶴千代。

一、寛文元年丑年七月廿七日日本庄ニる屋敷地拜領仕以處、木挽町海手之地所替地、願之通被仰付、中屋敷仕以。

又、

正則從四位下侍從。美濃守。隱居名泰應。幼名鶴千代。

一、寛文元辛丑年七月廿七日内々奉願以本庄之屋敷地拜領被仰付、子供多有之以間、屋敷地被下旨、御直蒙上意以。木挽町海手ニる町人共ニ被下以所を、本庄之屋敷地ニ替地被成下、往々子供差置度旨達上聽、願之通被仰付、中屋敷仕以。

ト有リ。

榊原照清

榊原照清本所ニ於テ屋鋪替ス。事寛文遺録ニ見ユ。

廿七日○寛文元年七月。○中略。

榊原越中守○照清。名代。榊原大膳。

右ニ抱屋敷本庄有之、右屋敷今度御堀ニ成候ニ付、於同所替地被下旨、老中被傳之。

阿部正能

阿部正能ハ、是日深川ニ邸地ヲ賜フ。

公餘付録拔萃

一、正能公部。○阿部。明曆三百年正月大火後、小石川御屋敷御上ケ被成、麻布下屋敷御住居御部屋住之由。
一、寛文元年辛丑七月廿七日於深川御屋敷御拜領、小石川之代地。

——子爵阿部家○福山藩。回答

〔附記〕 山谷通馬賃

萬治三年版小歌惣まくりニ、

萬治三年

市街恢弘時代

附記
山谷通馬賃

所々より吉原迄駄賃附の事。

一、日本ぞしより大門まで

並みだちん貳百もん。

一、飯田町より大門まで

なとだちん貳百もん。

一、浅草見附より大門迄

ふとだちん百三十二文。

馬子二人おむるぶしうたふり白馬たちん二百四十八文。

武江年表ニハ、

○明暦年 浅草見附前玉屋勘五兵衛笹屋利兵衛といふ船宿にて、始て猪牙

船を製す。山谷通ひの輩これに乗る。又所々より白き馬に乗りて通ひしも

ありしふり。奇跡考其餘の草紙に委し。はるの日のいとゆふわけて柳たをるは

誰々ぞ、白き馬にめしたるとのごよとうたひしも、此頃の事なり。

——武江年表補正略

猪牙船コ、ニイヘルハ江戸砂子ノ説ナリ、又一説モアレド、イヅレモヒ
ガコト也。チヨキブネ悪處通ヒニ用ヒソメシ頃ハ、二挺立トイヘリ。三挺
立モアリ。コレヲ停止ニテ、今ハ櫓一挺ナレドモ、三挺ノ名ハ残レリ。二挺

駒形堂

東京府所藏

江戸名所記挿圖也。當時駒形堂ハ、山谷通舟ノ發着地點ナリシト云フ。

所々より吉原遊駄賃附の事

一 日本橋しより大門まで

並みだちん貳百もん

馬奴二人こむるあしうたふかさり白馬駄賃三百四十八文

一 飯田町より大門まで

なみだちん貳百もん

備ご二人おむるぶしうたふ白馬駄賃三百四十八文

一 云々

ふみだちん百三十二文

正引洋浪時圖狀、大當部、河津堂、山谷、藤代、鐘、藤、櫻、丸、二百四十八文

武江年表ニハ

傳 堂

○明暦年 淺草見附前玉屋勘五兵衛笹屋利兵衛といふ船宿にて始て猪牙

船を製す山谷通ひの輩これに乗る又所々より白き馬に乗りて通ひしも

武江年表補正略云フ

武江年表補正略

猪牙船コ、ニイヘルハ江戸砂子ノ説ナリ又一説モアレドイヅレモヒ

ゴコト也チヨキブネ悪處通ヒニ用ヒツメシ頃ハ二挺立トイヘリ三挺

立モアリコレヲ停止ニテ今ハ一挺ナラズモ三挺ノ者ハ一挺ニテ二挺



モ三挺モ皆チヨキ舟ニテ、モト漁獵ノ船ナリ。正徳四年八月深川漁師ド
モ願書ヲ出ス、ソハ此度ちよき舟御停止付テ也。元來ちよき舟と申は、漁
船に御座所、惡所通ひの船に借し申者所々に出來申に付、惡所船名
に罷成、漁師共家業の障に可相成旨、迷惑に奉存間、御訴訟申上云々
ト見ヘタリ。

蓋新吉原遊廓新ニ移ルモ、地僻且遠ナルヨリ、漁舟若クハ貸馬ヲ以テ往來ノ
便ニ供シタル者ナル可シ。而モ貸馬ノ直ニ禁止セラレタルコトハ、撰要永久
録ニ左ノ文書ヲ載ス。

三谷通ひ馬貸申間敷證文

御請負申手形之事

一、今度三谷へけいせい買ニ、馬乗物ニ來由、被爲聞召、御法度ニ被爲仰
付、趣、各々様被仰付、通承届申。向後三谷に參、者、馬借し乗せ來
間敷。若於相背、え、い、う、様之曲事、ニ、あ、も、可、被、仰、付、い、少、々、御、恨、ニ、存、間、敷、い、
爲、後、日、馬、頭、馬、持、共、加、判、仕、申、い、依、如、件、

寛文元年丑ノ八月十一日

馬頭 太郎 兵衛印

附、河つけも此永に敷不差置之急度遂穿鑿可濟之事。

一、裏判並召状を受遅參之者、其所の遠近をかゝるへ日敷を積、輕重ニより或籠舍或可爲過科事。

右條、可相守之者也。

寛文元年八月廿二日

——御制法

日蓮宗寺院
令達

廿七日甲辰○寛文元年(紀元二三二一年)八月。○甲辰、三正綜覽。 日蓮宗寺院ニ令シテ、本寺ニ隨

順セシム。○柳營日記。

日蓮宗寺院
令達事蹟

日蓮宗寺院令達 柳營日記ニ、

廿七日○寛文元年八月。○中略。

一、日蓮宗累年本寺違背之末寺、向後可相隨本寺之旨、上意之趣、於評定所、身延久遠寺、池上本門寺、藻原妙光寺、中山法花經寺、京都本國寺名代谷中報恩寺。、玉澤法花寺名代谷中名代谷寺。、伊豆守○松平信綱。、豐後守○阿部忠秋。、美濃守○稻葉正則。、列座、井上河内守○正利。、板倉阿波守○重郷。、達之。御領私領末々當地へ召寄之、右之通猶可相達之旨、銘々寺號注帳面可差上之、此外連々訴訟之儀ハ、公儀御仕置相守之、重多不可訴之由、是又申渡之。

附記
市中取締

〔附記〕 市中取締

覺

一、此中及兩度まで相觸れ通り、町中木戸際ニ前店之庇并ニ床板立うけ置申間敷ハ、勿論商賣人置申間敷ハ事。

一、橋詰橋之上ニ商人、行人、願人等差置申間敷事。

一、海道へ商賣物何ニ多も出し置申間敷事。

一、材木竹薪河岸ニ積置ハ高サ、御定より少しも高く積置申間敷事。

一、材木町塗垂藏之後ニ材木積置申間敷事。

一、河岸通り突抜井橋臺際物上場御定之通急度明置可申事。

一、紺屋之毛がり河岸端廣小路上ニ家ニ付て可仕ハ事。

右ニ丑○寛文元年九月十七日御觸。

——正實事錄

九月十八日甲午○寛文元年(紀元二三二年)八月。○甲午、三正綜覽。 府内ニ駄馬乘入ヲ禁ス。○正實事錄撰

要永
久錄。

駄馬乘入禁
止事蹟

駄馬乘入禁止 正實事錄○撰要永二、久錄同。

覺

市街恢弘時代

- 一、兩國橋口。
- 一、淺草橋口。
- 一、柳原新橋口。
- 一、同和泉橋口。
- 一、筋違橋口。
- 一、小石川水道橋口。
- 一、田安御門之橋口。
- 一、牛込御門之橋口。
- 一、四谷御門口。
- 一、赤坂御門口。
- 一、麻布臺鍋島屋鋪之辻。
- 一、西久保土器町四辻。
- 一、芝金杉橋口。

右口を限り、在郷荷付馬并ニ駄賃馬小荷駄馬口付之者、乗りゆる参りゆる致下馬、夫より内ニ多一切不可乗旨、可申渡事。

丑〇寛文 九月十八日

右御觸町年寄衆ニ多町々月行事致請判い。

是日〇寛文元年(紀元二二二二)九月十八日。及廿二日戊戌〇寛文元年(紀元二二二二)九月十九日。〇戊戌三三三三。〇十月朔日

丁未〇寛文元年(紀元二二二二)九月十八日。〇丁未三三三三。〇廿日丙寅〇寛文元年(紀元二二二二)九月十九日。〇丙寅三三三三。〇警火町觸有

り。〇正寶事錄。撰要永久録。

警火町觸 正寶事錄云フ、

覺

警火町觸

蹟火町觸事

一、町中火事出来節、向三町、左右貳町裏町三町、火元之町共ニ合多九町、早速駈集り火を可消、片町ならバ左右貳町裏町三町、火元共ニ六町、欠集り火を可消事。

一、町中壹町之内、片木戸ニ手桶三拾、片木戸手桶三拾、合六拾水を入可積置、片町ならバ拾五宛合三拾、右同前可置事。

附、壹町之内はしご六挺宛可置い。

但シ片町ならバ三挺可置事。

一、壹間半口より四間半口迄之間口之家、手桶三ツ宛水を入、戸口ニ成共又内ニ成とも不斷可置之。五間口より九間半迄手桶五ツ、左右同前。拾間口より貳拾間口迄手桶拾宛、右同前可置事。附水道無之町ニシテ水溜桶木戸際壹ツ宛可置事。

右之手桶階子勝手次第二十月晦日を限り出し置可申い旨、可申渡事。

丑〇寛文 九月十八日

右ニ町年寄衆ニ多月行事致請判い。〇撰要永久録同。

覺

市街恢弘時代

一、町中爲火之用心來る十月より來春二月中迄中番之者壹町之内片ヶ輪ニ
貳人宛兩ヶ輪四人宛夜中斗差置可申。辻番中番之者火之用心無油斷相觸
ハ様可申付事。

一、町中藁葺茅葺小屋之家根土ニ塗可申。油斷無之様月行事廻り見ハ
可申付事。

丑〇寛文 九月廿二日

右ハ丑九月廿二日御觸。

覺

一、町中半切ニ水を溜蓋をいたし片側ニ貳ツ宛壹町ニ四ツ置可申。但片町
ニ貳ツ置可申。右水溜之水水桶水を朝夕海道え打掃除いたし可申。水溜
ニ浚水桶も不斷水絶不申様ニ可仕。勿論寒天之時分も水溜并ニ水桶
之水氷不申様ニ可仕。半切之置様ニ地形並ニ堀入ハ成共又ニ地形之上
ニ成とも其町ノ者とも勝手次第置可申。水溜之置處ニ此方之差圖之所
ヘ置可申事。

一、町ニ長サ三拾間まで水溜半切貳ツ階子水桶とも壹町之半分置可申。

附三拾間より長キ町ハ水溜半切梯子水桶之數も壹町並ニ置可申事。

一、町中ニ井土無之町數多有之ハ間自今以後ニ壹町ニ井戸五ツ或ハ六ツ掘
置可申事。

丑〇寛文 十月朔日

右御觸町年寄衆ニハ月行事致請判。

覺

一、町中ニ藁葺茅ふきの小屋造り置ハハ向後板ふきニ致。若少斗之儀
ニハハ繕ニ其儘跡を土ニ塗可申。唯今まで有之ハ藁ふき茅葺之
小屋切ニ土ニ塗置ハ様申渡得共今ニ塗不申所數多有之ハ間早ニ土ニ
塗可申。此上遅ニ仕ハハ急度可申付事。

一、ニ藁葺茅葺之小屋新規ニ造リハ儀自今以後堅御法度ニハ間左様ニ相心
得可申事。

一、町中度ニ申渡ハ火之用心之道具之品ニ少しも油斷なく近日出來ハ様可
申付事。

丑〇寛文 十月廿日

街恢弘時代

右御觸町年寄衆ニ多月行事致請判_ハ。

——正寶事錄

本所墳築竣

廿二日戊戌

○寛文元年(紀元二三二一年)九月。○戊戌(三正綜覽)。

老中酒井忠清

○雅樂頭。○阿部忠秋(後守)。

稻葉正則

○美濃守。

本所_{○市内}ヲ巡視ス。墳築工成ルヲ以テ也。○柳營日記。

本所墳築竣成事蹟

本所墳築竣成

柳營日記ニ據ル。

廿二日_{○寛文元年}九月_{○中略}。

本所築地出來付_{○酒井忠清}、雅樂頭_{○阿部忠秋}、豐後守_{○美濃守}、相越之。

〔附記〕 火之番處罰

廿六日_{○寛文元年}九月_{○中略}。

一、去ル頃石川主殿頭_{○憲}、御預之火之番蒲田十兵衛_{○女難之儀ニ付}、無作法在之ニ付、今日切腹被仰付之。爲檢使御徒目付兩人參ル。○鈴木太兵衛、高橋角左衛門。

右五月上旬_{○寛文元年}一ヶ谷天龍寺前町人彌兵衛妻勾引之科ニ依多也。

——柳營日記

各所營造奉行等授賞

十月二日戊申

○寛文元年(紀元二三二年)戊申(三正綜覽)。

各所ノ營造告成スルヲ以テ、奉行以下ニ授賞ス。東海寺修理奉行戸川安利_{○平右衛門}、久留島通貞_{○半}、

上野本院修理奉行三好長富_{○備前守}、稻葉正定_{○次左衛門}、大手腰掛鍛

冶橋疊小屋修理奉行松平正直_{○新九郎}、岡部久綱_{○庄左衛門}、傳奏館評定所營造奉行千本和隆_{○兵左衛門}、堀直依_{○八郎右衛門}、大森好輝_{○七郎}、等也。○寛文

文遺錄。嚴有院殿御實紀。

各所營造奉行等授賞

上野本坊東海寺傳奏館評定所大手腰掛疊小屋鍛冶橋ヲ修理營造スルコト、既ニ之ヲ記ス。是ニ至リ工成リ授賞有リ。

二日_{○寛文元年}十月_{○中略}。

金三枚、吳服三ツ、

所々御普請奉行

三好備前守_{○長富}。

稻葉次左衛門_{○正定}。

久留島半四郎_{○八通貞}。

戸田平右衛門_{○利安}。

千本兵左衛門_{○隆和}。

堀八郎右衛門_{○依直}。

大森半七郎_{○輝好}。

岡部庄左衛門_{○綱正}。

松平新九郎_{○直正}。

各所營造奉行等授賞事蹟

右所、御普請出來ニ付、被下之。

銀十枚ツ、

大工棟梁

右同斷被下之。

——寛文遺録

二日○寛文元年十月東海寺修理奉行書院番戸川平右衛門安利久留島半八郎通貞、上野本坊修理奉行小姓組三好備前守長富稻葉次左衛門正定、大手腰懸鍛冶橋壘部屋修理奉行書院番松平新九郎正直、小姓組岡部庄左衛門久綱○正、傳奏館並に評定所構造の奉行小姓組千本兵左衛門和隆、書院番堀八郎右衛門直依、大森半七郎○好輝增長○中は金三枚時服三つ○中給ふ。みふ成功にてふり。

——嚴有院殿御實紀

柳營日次記ハ、家譜ヲ引テ東海寺修理ノ行賞ヲ十二月二日ニ繫ク。

二日○寛文元年十月

家譜

一戸川平右衛門東海寺御破損奉行相勤ハニ付、爲御褒美金三枚時ふく二被下之。

——柳營日次記

安利○平九郎主膳。平右衛門。

寛文元年十月二日東海寺修補のことを奉行せしにより、時服三領黄金三

枚をたまひ○下

通貞童名玄壽半八郎。左兵衛。出雲守。從五位下。修理亮。

寛文元年十月二日東海寺修理の事を奉行せしにより、時服三領黄金三枚をたまふ。

長富初勝任右兵衛。備前守。從五位下。

寛文元年十月二日東叡山本院の普請を奉行せしにより、時服三領黄金三枚を賜ふ。

正定初正利龜之助。治左衛門。清左衛門。

寛文元年十月二日東叡山本院修復の事を奉行せしにより、時服三領黄金三枚をたまふ。

正直初政勝新之助。新九郎。

寛文元年十月二日大手の腰掛修復の奉行を勤めしにより、時服三領黄金三枚を賜ひ○下

正綱庄左衛門土佐守。從五位下。今の呈譜にはじめ久綱、後久岡にあらたむといふ。

寛文元年正月二十四日大手腰掛の修理をうけたまはり、五月四日また鍛

治橋御門の普請を奉行す。十月二日腰掛の修造終るにより、時服三領黄金三枚を賜ふ。

和隆初義吉。又七郎。兵左衛門。
○千本。

寛文元年正月二十四日傳奏屋敷をよび評定所の普請を奉行せしにより、時服三領黄金三枚を賜ふ。

直依七之助。八郎右衛門。

寛文元年十月二日傳奏屋敷をよび評定所普請のこと奉行せしにより、時服三領黄金三枚をたまはり、略。下
好輝猪之助。半七郎。今の呈譜増長に作る。
○大森。

寛文元年閏八月十三日御徒の頭となり、十月二日傳奏屋鋪評定所修復の事を奉はりしにより、時服三領黄金三枚をたまふ。

——寛政重修諸家譜

附記、一
賜宅

〔附記、一〕 賜宅

柳原居住ノ坊主ヲ本所ニ移スコト、既ニ之ヲ述ブ。傳ヘテ左ノ如ク爲スハ、其新宅地指定セラレタルヲ謂フ歟。或ハ一部残り居タル者ノ轉移歟。

二日○寛文元年
十月○中略。

柳原土手在之御數寄屋坊主御廣敷坊主屋敷、就御用被召上、替地於本所新川端被下之。

三日○寛文元年
十月○中略。

一、柳原住居之坊主之輩爲替地木庄ニ多被下之、昨日被仰付い。

晦日○寛文元年十
二月○中略。

一、柳原并御臺所町罷在い輩、引料金被下之。——柳營日次記

〔附記、二〕 寶樹院別當作事料

十八日○寛文元年
十月○中略。

一、寶樹院殿別當常徳院、爲作事料金三百兩被下之。

——柳營日次記

寶樹院ハ、將軍家綱生母青木氏、寛政呈譜ニ左ノ如ク見ユル者也。

青木三太郎丹治利長女
女子 品川式部大輔源高如妻。

母 増山氏某女、後號泉光院。

嚴有院様(○徳川家綱)御母公
女子

市街恢弘時代

附記、二
寶樹院別
當作事料

御母 右同腹。

承應元年壬辰十二月二日御逝去。寶樹院殿贈正二位花域天榮大姉。

東叡山

御別當

勸善院

利澄從五位下。彈正少弼。幼名五郎。後辨之助。又正利と改。

寛永二十年癸未、初ゝ御目見。以上意、増山辨之助と改。依之藤原姓増山氏代々襲用之。略。下

新川舟路巡

十一月朔日丁丑寛文元年(紀元二三三二)丁丑。三正綜覽。關東郡代伊奈忠勝門。初忠克。其他ヲシテ新川水路其他ヲ巡察セシム。殿。御實紀。其

新川舟路巡察事蹟

新川舟路巡察 嚴有院殿御實紀ニ、

十一月朔日寛文元年(紀元二三三二)十一月朔日。關東郡代伊奈半左衛門忠勝并に代官等、武總常三州新田

新川舟路巡察に遣はさるゝによて、拜し奉る。

寛文遺錄左ノ如ク傳フルハ、此ノ一行ヲ謂フ乎。

廿日寛文元年十一月。中略。

銀五十枚。時ふく三羽折。金貳枚。同貳同。

伊奈半左衛門勝。忠

細田小兵衛徳。時

同。

近山五郎右衛門高。安

右ニ下總常陸新田場所見立歸參ニ付被下旨、老中被傳之。

附記 淺草鹽硝庫爆破

〔附記〕 淺草鹽硝庫爆破

三日寛文元年十一月。中略。

一、已上刻堀田帶刀正休。淺草之屋敷鹽硝藏、修復之人夫あそこ之火ニ多焼亡。其響如雷鳴、依之近所之寺十一ヶ寺餘、近邊大名屋敷在家數多及破損。帶刀屋敷足輕人足拾人餘肢體寸ニ切ひる死。(奥)人足四人、足輕二人、左官一人、死骸五十間程脇へ散。

柳營日記

三日寛文元年十一月。中略。此日、堀田帶刀正休が淺草邸の鹽硝庫修理するとて、庫中に入し工人烟草の火をあやまち、火薬にうつりしかば、俄に雷鳴のごとくひゞき出て、庫中に入りし足輕二人、工人一人、傭夫四人の死骸、寸々にくだけ五十間餘飛散り、其外毀傷するもの若干あり、其ひゞきにて近邊大小名の邸宅民屋あまた崩頽し、寺院十一ヶ所やぶれそこねしとぞ。

嚴有院殿御實紀

十五日辛卯寛文元年(紀元二三三二)十一月。辛卯。三正綜覽。再ヒ市中取締及警火ニ關スル

市街恢弘時代

一一〇一

市中取締及警火町觸及

市街恢弘時代

市中取締及
火町觸事
蹟

町觸有リ。○正寶
事錄。

市中取締及火町觸 正寶事錄ニ、

覺

- 一、町中橋之上并ニ橋臺之左右諸商人算置願人行人等一切置申間敷事。
- 一、町中諸商物海道へ出し置申間敷事。尤され際より先へ出申間敷事。
- 附、木戸際ニ賣物一圓置申間敷事。
- 一、町中壹町之内手桶六拾梯子六挺水溜四ツ置可申事。但片町ニハ手桶參拾水溜貳ツ梯子三挺置可申事。三拾間より長き町ニ壹町之通り手桶梯子水溜桶置可申事。三拾間より短き町ハ片町之通りニ置可申事。水溜手桶之水ハ明不申様朝暮取替可申事。其節ハ水溜之水手桶之水を海道へ打ち道能掃除可仕事。
- 一、町中井戸無之町ハ壹町ニ井戸五ツ或ハ六ツ掘可申事。但し年内井戸掘申事迷惑之由御訴訟申事御定之外より水溜多く置可申事。手桶も右同前。
- 一家ニ差置手桶も先日被仰付通リ差置可申事。
- 附、町々之突抜當夏被仰付通リ掃除仕、明置可申事。

丑○寛文 十一月十五日

右町中連判。○撰要永
久録同。

〔附記〕 屋鋪給賜

十六日○寛文元年十月
○中略。

渡邊丹後守○吉
綱。

——柳營日次記○寛文
遺錄同。

仙臺○陸
前國。城主伊達龜千代○
綱。

十二月朔日丙午○寛文元年紀元二二三
一年○丙午三正綜覽。

鷹場ヲ返上ス。○柳營日次記。嚴
有院殿御實紀。

伊達氏鷹場返上 左ノ如ク傳フ、

朔日○寛文元年十
○中略。

松平龜千代○伊達
綱村。

——柳營日次記○庸
康井御

右幼少ニ付拜領之鷹場差上、場所之繪圖家來持參登城、永井伊賀守尙康井御

鷹師頭ニ相渡。十二月朔日○寛文元
年○中略。松平龜千代幼稚によて、鷹場を返し奉る。

——嚴有院殿御實紀

附記
屋鋪給賜
瀧川利貞

伊達氏鷹場
返上

伊達氏鷹場
返上事蹟

肯山公伊達綱村

是歲元○寛文幕府内命アリ、久喜南○武藏國南埼玉郡ノ遊獵地ヲ返納ス。

——東藩史稿

松平氏其他
屋鋪給賜

八日癸丑年○寛文元年紀元三三二一松江雲○田國城主松平直政羽○田守其他屋鋪替ス。九日甲寅年○寛文元年紀元三三二一亦屋鋪替有リ。十五日庚申年○寛文元年紀元三三二一嚴原馬○對國城主宗義馬○對守其他下屋鋪ヲ賜フ者多シ。柳營日次記。

松平氏其他
屋鋪給賜事蹟

松平氏其他屋鋪給賜 屋鋪ヲ給賜セラレタル者左ニ舉グ。

八日二○寛文元年十月中略。

松平出羽守政○直

朝比奈彌三郎泰○衆通

右屋敷替仕度旨相願以付願之通被仰付。

小出小才次明○吉

内田玄勝

右同斷相對替仕度旨願之通被仰付之。

伊澤隼人正○政

右組同心五十人屋敷無之付被下旨被仰渡之。

久貝正信

久貝惣左衛門信○正

右組與力六騎同心卅人之内廿人屋敷無之付被下旨、老中被傳之。

本多正貫

本多豐前守貫○正 廣敷添番屋敷

右相對替被下旨被仰渡之。

——寛文遺錄

九日二○寛文元年十月中略。

一、

大久保右京亮教勝。

米津出羽守田盛。

右與力同心、曲淵清藏吉○次同心、齋藤忠右衛門忠○勝勝屋庄右衛門利○綱同心屋敷無之、屋敷被下之。

——柳營日次記

九日二○寛文元年十月中略。

大御番頭 大久保右京亮勝○教

御書院番頭 米津出羽守盛○田

右組與力同心無屋敷被下旨、同席ニ多同人被傳之。

大久保教勝
米津田盛
曲淵吉次
齋藤忠勝
勝屋利綱

伊澤政信

小出吉明
内田玄勝

松平直政
朝比奈泰

右組同心無屋敷付被下旨同席ニ多同人被傳之。

御具足奉行
一二〇六
曲淵清藏

川船奉行

勝谷庄右衛門

齋藤忠右衛門

右兩人組同心屋敷無之付被下旨於同席伊豆守被申渡之。

——寬文遺錄

十五日寬文元年十月
二月。○中略。

一下屋鋪被下以面之。

新規下屋敷被下。

宗 義眞
織田信尙
松平定重
本多俊次
松平昌勝
松平昌親
池田恒元
伊達宗勝
山内忠直
龜井茲政
京極高仲
永井直清

宗對馬守義眞。
松平越中守定重。
松平中務大輔昌勝。
松平備後守恒元。
山内修理大夫忠直。
京極飛驒守高仲。
織田山城守信尙。
本多下總守俊次。
松平兵部大輔昌親。
伊達兵部少輔宗勝。
龜井能登守茲政。
永井日向守直清。

九鬼隆昌
松平直次
細川行孝
伊達宗純
大村純長
小笠原貞
信 重綱
岩城重綱
酒井忠恒
酒井忠解
稻垣重祥
内藤政直
毛利高直
丹羽氏純
大關增親
市橋政信
西郷延員
一柳直次
立花種長
土方雄豐
池田黨彰
建部政長
牧野康道
前田利豐
立花忠茂
本多政勝
京極高和
植村家貞
堀親昌
安部信盛

下屋敷引替被下以分。

九鬼長門守隆昌。
細川丹後守行孝。
大村因幡守純長。
岩城伊豫守重綱。
酒井備中守忠解。
内藤右近大失政直。
丹羽式部少輔氏純。
市橋下總守政信。
一柳山城守直次。
土方奎之介○雄。
建部内匠頭○政。
前田右近利豐。
立花飛驒守忠茂。
京極刑部少輔○高。
堀美作守○親。
松平市正直次。
伊達兵部少輔宗純。
小笠原土佐守貞信。
酒井大學頭○忠朝。
稻垣信濃守重祥。
毛利伊勢守高直。
大關土佐守增親。
西郷若狹守延員。
立花和泉守種長。
池田右京○黨。
牧野新三郎○康。
木多内記政勝。
植村右衛門佐家貞。
安部攝津守信盛。

小笠原忠
知
伊達宗利
黑田長興
分部壽高
小堀正之
谷衛政
一柳末禮

右之面々望之地ニ多下屋敷被下之旨被仰出之。

十五日○寛文元年十
二月○中略。

柳營日記

小笠原壹岐守知忠

伊達大膳大夫宗利

黑田甲斐守長興

分部若狹守壽高

小堀備中守尹貞之

谷大學政衛

一柳縫殿助末禮

立花飛驒守

本多内記

伊達大膳大夫

京極刑部少輔

小笠原壹岐守

黑田甲斐守

植村右衛門佐

堀美作守

分部若狹守

安部攝津守

谷大學頭

小堀備中守

一柳縫殿介

右之面々下屋敷無之段達上聞願之通被下旨於御白書院縁類老中出座雅樂頭傳之。

宗對馬守

織田山城守

松平越中守

本多下總守

松平中務大輔

松平兵部大輔

松平備後守

伊達宮内少輔

龜井能登守

京極飛驒守

永井日向守

九鬼長門守

松平市正

細川丹後守

伊達兵部少輔

大村因幡守

小笠原土佐守

岩城伊豫守

酒井大學頭

酒井備中守

稻垣信濃守

内藤右近大夫

毛利伊勢守

丹羽式部少輔

大關土佐守

市橋下總守

西郷若狹守

一柳山城守

立花和泉守

土方奎之助

池田右京 建部内匠
牧野新三郎 前田右近
右同斷下屋敷被下旨願差合在國ニ付親類ニ老中被傳之。

——寛文遺録

酒井大學頭忠恒初老之助。初忠明。大學。

——寛政呈譜

一、寛文元丑年十二月十五日千駄谷下屋鋪拜領仕。内宗義眞下屋鋪ハ伯爵宗家回答原藩。ニ左ノ如ク見ユル者歟。非歟。

江戸時代ニ於ケル宗邸ニ就テ略。中

寛文二寅三月四日御拜領也。

一、箕輪御下屋敷 九拾間四方。

八千百坪。

文化十三丙子八月八日付ニ箕輪八千坪之内三百坪御普請組三橋健次郎へ。

池田恒元賜フ所ハ謂フ所ノ淺草別邸ナルコト備藩邸考ニ見ユ。即チ

同家栗家。後。共淺草別邸ハ淺草寺ノ乾東本願寺ノ北ニアタリ方今新谷侯加藤

氏豫州大洲ノ支封邸南隣ノ地ナリ。此邸ハ寛文元年十二月十五日ノ御城日記ニ下屋敷拜領松平備後守トアリテ其地ヲハ記サレト寛文延寶ノ圖此處ニ松平備後又池田豊前トアレハ即チ此邸ノ事マカフヘカラス。此頃ノ御家ノ日記ニ淺草新御屋敷ト記シタルモ亦此邸ノ事ナリ。是鳥越邸ヲモ淺草御屋敷ト唱フレハ夫ニ別ツヘキ爲ナルヘシ。素ヨリ安栗ノ御下屋敷ナレハ此比ハスヘテ支封ノ邸ハ御本家ノ邸モ同ヤウノ取向ナリシ事ト見エタリ。又或ハ安栗家ハ鳥越ノ一邸ニテ事タリヌレハ表向ノミ安栗ノ御下屋敷ニテ實ハ御本家ノ御屋敷ニ用ヒラレシモシルヘカラス。同八年二月四日上野車坂ヨリ失火シテ下谷邸并ニ鳥越邸焼失セシカハ曹源公眞證夫人トルニ火ヲ本邸ニ避タマヒ此時曹源公イマタ世子ニテ下谷邸ニオハセシニ同十九日此淺草邸ニ移ラセ玉フ。是日烈公ヨリ山内權左衛門按ニ此時ヲ御使ニテ御二方へ箱肴并ニ銀子百枚ツ、參ラセラレシ由其時ノ日記ニ見エタリ。日記ノ文ニ十九日伊豫守様移徙云々トタ御本家御屋敷ノ如ク記セリ。又是ヨリ先二月六日向日火起リ飯田町邊田安清水ノ内迄燒シ大火ノ條伺書ニ福照様芝ノ御小屋へ御退酉ノ刻御歸リ御前様淺草御新御屋敷へ御退夜戌ノ刻御歸ト記セリ。芝ノ御小屋トアルハ此時金杉新掘御普請御手傳ノ御辨當小屋ナリ。御前様トアルハ圓盛夫人ノ御事淺草新御屋敷トアル即此邸ノ事ナリ。是等ノ文モ我邸ノ如ク記セリ。又淺草御屋敷トイハ淺草新御屋敷トイヘル此二條ハ皆同斷ナリ。此時鳥越ハ燒失シタレハ鳥越ナラ市街恢弘時代

又事ハ明ラカナリ。又按ニ此時鳥越モ火災アレハ、備後守殿ハ御在所ナレトモ、兵部殿此邸ニ移リ玉フヘキニ、曹源公ノ移ラセ玉ヒシ事如何ナルユヘニヤ。サレトモ此頃ハシカテ物事簡易ニシテ、殊ニ支封ノ君ハ親カクテ曹源公ハ程ナク麻布ノ邸ニ移ラセ玉ヒヌ。麻布邸ノ條ニ委延寶七年安栗ノ御家絶ルニ及ンテ、鳥越ハモト御本家ノ御屋敷ユヘ、曹源公ヘ返シ下サレ、下屋敷ハ備後殿拜領ヤシキ故差上ラルヘキ旨台命アリ。事ハ鳥越ノ然ルニ其後何方ヘモ渡サレサリシ故其マ、御本家御預リニテアリシト見エテ、四年ヲ經ルノ後天和二年六月十日ニ至リ、此邸拂上ラルヘシトノ事ニテ、御普請奉行大久保甚右衛門田中孫十郎ヘ諸役人立合引渡シ、同十九日マテニ立家悉クコホチ取、同廿三日野村彦太夫ヘ渡シ、番人等殘ラス引トリヌ。已上此時此邸寛文元年ヨリ爰ニ至リ、廿二年ニシテ廢セラル。サテ此時ノ日記ニハ、タ、淺草御下屋敷今日上リ申ニ付云々ト記シ、故ノ安栗ノ御下屋敷ト云事ヲ記サ、レハ、タシカナラサルニ似タレト、此時別ニ淺草御屋敷ト云モノナク、且タシカナル考證アリ。其故ハ天和三年十二月十九日松平伊豫守上ケ屋敷、松前兵庫ヘ下サル、由見ユ。其叢ニ、按ニ此文モ故池田數馬上ケ屋敷ト記スヘキ處ナレトモ、久シク曹源公御預リトナリテ其後拂上ラレシ故、カク我上ケ屋敷ノ如クハ記セシナルヘシ。兵庫ト云ヘルハ志摩守規廣ノ幼名ニテ、今梁川侯ノ祖ナリ。松前家ニテ此邸ノ事ヲ

搜索セシカトサタカナラサリシニ、其後寶永ノ比ノ圖ニ此邸ノ所ニ松前志摩ト記セルアリ、是ニ依テ天和ノ淺草御上ケ屋敷ト云ヘルハ、此安栗御下屋敷ナル事タシカナハ知ラレヌ。 — 備藩邸考

細川行孝邸ハ、白金臺下屋鋪ナルコト、寛政呈譜ニ左ノ如ク有リ。

行孝從五位下。丹後守。幼名宮松。帶刀。○細川。

一、寛文元辛丑年月日不知、白金臺ニ多下屋敷拜領仕ハ。 — 寛政呈譜

豫州吉田ノ邑主伊達宗純ノ賜邸ハ、子爵伊達家吉田藩。回答ニ左ノ如ク記ス者是

歟。

一、寛文二壬寅年五月朔日

白銀村下屋敷拜領。

酒井忠恒賜邸ハ、

初代

一、寛文元丑年十二月十五日千駄谷下屋鋪拜領仕ハ。

— 寛政呈譜

廿二日丁卯

○寛文元年(紀元二三二一年)十二月。○丁卯、三正綜覽。

演劇其他ノ興行場所ヲ限定ス。

興行物場所

市街恢弘時代

一一三

本家酒井宮内大輔忠勝次男
酒井大學頭忠恒
初老之助。大學。初忠用。(○中略)

興行物場所
限定事蹟

撰○正寶事錄
要永久錄。

興行物場所限定

正寶事錄久○撰要永ニ據レハ、左ノ如シ。

覺

- 一、諸見物芝居物仕いものハ、堺町音屋町、木挽町五丁目、六丁目、此所ニ多可仕い。自今已後他所之町中ニ多堅く仕間敷事。
- 一、勸進相撲前より町中ニ多御法度ニハ、間彌其旨御心得、町中ニ多爲致申間敷ハ、附めつた的町中ニ多爲仕申間敷事。
- 一、勸進能仕いもの於有之を、町年寄方迄相斷可申事。

丑○寛文十二年十二月廿二日

右御觸町年寄衆ニ多月行事致請判い。

是年○寛文元年(紀元二二二一年)寺社ノ起立若クハ轉移シタル者若干有リ。○文

政寺社書上。新編武藏風土記
稿地子古跡。寺社帳。府内備考。

寺社起立轉移

寛文元年中ニ於ケル者左ノ如シ。

宰府天神社

寛文元年八月廿三日葛西領龜戸村中央ニ建立ス。

龜戸村○武藏國葛飾郡。○中略。

寺社起立轉移

寺社起立轉移

宰府天神社

天神社 ○上。當社造營ノ來由ハ、大宰府ノ神職菅原善昇十八世ノ孫大鳥居信祐○中。江戸ニ下リテ此村ノ中程ニ有シ天滿宮ノ小祠ヲ修造シテ、カノ神體ヲ遷セリ。時ニ寛文元年八月二十五日ナリ。是ヲ元宮天神ト號ス。其地ハ今ノ社地ヨリ東ノ方へ十六七町隔リタル所ナリ。○下略。餘ハ

——新編武藏風土記稿

幸神社 關口臺町ニ起立ス。

幸神宮

社地三拾六坪餘、除地。

關口目白臺町

右ノ關口臺町鎮座、幸神宮社地之儀を御除地ニ多、往古より社地ハ庚申を申石塔御座い處、寛文元年之事に御座い哉、關口村之内ニ幸神像體其塚之處に勸請仕い節より、其砌之神主之儀を一眞齋悴形部、幸神宮神事仕來い處、其後宮城嶋伊勢悴多年病身ニ付、社職難相勤、往古之通り私家筋之儀ニ御座い得を、乍恐天下泰平國土安全六穀成就萬民豐樂之御祈禱朝夕相勤相續仕い。

——府内備考

諏訪明神社 麻布本村町ニ在リ。舊社地仙臺伊達氏ノ賜地ニ入ルヲ以テ轉移

市街恢弘時代

一一五

諏訪神社

幸神社

成満寺

スルコト下文天真寺ノ條ニ併録ス。
成満寺 芝田町ヨリ三田聖坂ニ移ル。

浄土真宗 不動山無量院成満寺 ○中

一、當寺起立之儀ハ、元真言宗ニ多、略。三代目了賢省齋法橋略。○中 元和元乙卯年江戸八丁堀ニ多成満寺を起立仕、伏見淨泉寺之兼帶ニ仕、御當地御繁榮ニ付、同三四年之頃、遂ニ伏見淨泉寺も御當地木挽町ニ引移り、寛永十二乙亥年八丁堀成満寺を芝田町ニ引移し、其後寛文元辛丑年又々三田聖坂ニ引移。

——文政寺社書上

藥王寺

藥王寺 三田臺町ニ移ル。

房州長狹郡小湊誕生寺末
武州荏原郡三田臺裏町
日蓮宗 妙莊山藥王寺

一、境内古跡御年貢地

坪數九百九拾貳坪七合三勺壹才。

此内三百八拾四坪 境内。

三百坪

持添地。

貳百六拾九坪

町並抱屋敷。

三拾九坪七合三勺壹才 町並抱屋敷。

但、二ヶ所共往古寄附人有之候由候へ共、年月不相分候。

一、寺起立之儀ハ、元和七百年開闢 從元和七百年至寛永十酉此内十三年之間、麻布村之内狸穴ニ罷在候。寛永十一戌年ヨリ承應二巳年迄二十ヶ年之間、今井村ニ罷在候。同年御用地ニ被召上、承應二巳年ヨリ寛文元丑年迄九年之間、鮫橋ト芝金杉町ト貳ヶ所ニ罷在候。寛文元丑年三田臺町へ引移、寛文元々文政十一戌子年迄百六拾七年、都合貳百八年ニ相成申候。

——文政寺社書上

本正寺、妙源寺、妙圓寺 寛文八年マデ下高輪臺町證誠寺境内ニ借地ス。内妙圓寺ハ寛文二年ヨリ借地スルモ、姑ク此ニ附録ス。

築地本願寺末

下高輪臺町

浄土真宗

長命山桐樹院證誠寺

本正寺

一、碑文谷法華寺末

右ニ寛文元年々寛文八年迄八箇年之間境内ニ罷在候。

一、房州古湊誕生寺末

妙源寺

市街恢弘時代

一一一七

本正寺
妙源寺
妙圓寺

右ノ當地拜領之已前ノ境内ニ罷在ハ故、拜領之節同時ニ當地ニ引移、寛文八年迄十六ヶ年之間境内ニ罷在候。

一、同末

妙圓寺

右ノ寛文二年ノ寛文八年迄七箇年之間當寺境内ニ罷在ハ。

已上三ヶ寺何方ニ轉地仕ハ哉、相知不申候。——文政寺社書上

天真寺 麻布本村町諏訪社北ニ起立ス、社ハ故地伊達氏ニ入ルヲ以テ此ニ移レル也。

天真寺

覺

本寺京紫野龍寶山大德寺末
禪宗臨濟派 佛陀山天真寺

一、境内惣坪數 三千百五拾坪。

内、千八百六拾貳坪諏訪明神古跡拜領地。

右坪數之内東北之間本村町裏之方間口壹間奥行拾貳間之道地御座候、往古諏訪社之入口道ヲ申傳候。

古跡年貢地千貳百八拾八坪。

寛文元辛丑年六月十四日寺社御奉行井上河内守利。正殿被仰渡、地割御奉行

長井彌右衛門元。直殿、城半左衛門朝殿、喜多見五郎左衛門恒。重殿、本郷庄三

郎勝。泰殿、右四人檢地御渡拜領仕候。古跡御年貢地同年ニ借申候。後享保十四

己酉年四月織田越前守殿御檢地御改御座候。

一、開闢起立之儀、鎮守諏訪明神社、當時松平陸奥守殿下屋敷之場所ニ有之候由、右陸奥守殿拜領地ニ成候節、當地ニ引移し相成候。其節ハ別當ニ自性院ト申候處、開山僊溪和尚當地所拜領之後、天真寺ト寺號相改申候年月不相知候。

——文政寺社書上

天真寺 本村町布。麻ニ在リ、佛陀山ト號ス。京紫野大德寺末ナリ。開山仙溪ハ

濃州ノ人ニテ、紫野玉林院ノ開山月岑ノ弟子ナリ。後當國ニ來リ、澁谷祥雲寺

ノ開山龍岳ニ嗣法シ、寛永十年玉林院ノ住僧寂セシニヨリ、其後住ニ成リ、慶

安元年祥雲寺二世默翁ノ遺命ニヨリ、祥雲寺ニ移住シ、承應三年敕ヲ奉シテ

紫衣ヲ賜フ。其頃此地ハ諏訪明神今境内ノ鎮守トナス。ノ社地ニテ、別當ヲ自性院ト號

セシカ、此地ヲ寛文元年仙溪ニ賜ハリケレハ、寺地トナシ、住職ノ後、今ノ寺號

ニ改タム。略。中境内三千百五十坪、内千八百六十二坪ハ拜領地ニテ、此内東北

町ノ裏ニ一間ニ十二間ノ小徑アリ、往古、諏訪社ノ入口ト傳フ。千二百八十八坪ハ年貢地ナリ。

市街恢弘時代

諏訪社 往古ハ今ノ松平陸奥守カ下邸ノ地ニ在リシカ、陸奥守ニ其地ヲ賜ハリシ時遷座セリ。後此社地ヲ當寺ニ賜ヒケレハ、境内ノ鎮守トナス。神體ハ秘セリ。

衆寮四字。

如是菴 開山及ヒ檀家ノ位牌ヲ置ク。

桂林菴 開山仙溪カ造立スル所ナリ。

一時軒 二世順叟カ造立セシ所ニテ、延享二年火災ニ罹リ廢ス。

圓成菴 三世清岳カ造立セシ所ニテ、前ト同シク廢ス。

— 府内誌殘編

龍源寺

龍源寺 麻布本村ニ寺地ヲ購入ス。

京妙心寺末 瑞雲山龍源寺

境内拜領地千二百五十坪餘。

三田古川

起立之儀、上杉家隱之禪尼、越溪雲游之比、御歸依ニシテ、寛文元丑年中麻布本村ニシテ龍翔院ヲ申故基、并右境内ニ御座シ、水月堂御求被成、越溪安居之地

と被成也。

— 府内備考

西福寺

西福寺 麻布本村ヨリ新堀ニ移ル。

京都東六條本願寺末
麻布本村新堀 淨土眞宗 金生山西福寺

境内西ノ久保大養寺領 古跡年貢地貳百坪餘。

持添卵塔場百十貳坪。

一、當寺草創之儀、寛永七庚午年麻布本村ニシテ起立仕、寛文元丑年迄三十壹ケ年罷在候處、其節小出越中守殿御用地ニ相渡リ候ニ付、同村ニ拙寺墓所地面有之候故、奉相願引越申候。則當時罷在候場所ニ御座候。尤も起立之西本願寺末寺ニ有之候處、萬治三子年九月九日東本願寺ニ歸參仕、右之節官職御免狀ニ武州豊島郡江戸麻布西福寺ト有之候。且拙寺近邊御鷹場ニシテ、廣尾原御成之節、若年寄様御下宿ニ相成申候。

— 文政寺社書上

淨專寺

淨專寺 麻布新町ヨリ南仲町ニ移ル。

京都東六條本願寺末
麻布南仲町 淨土眞宗 米澤山淨專寺

一、境内惣坪四百六拾六坪七合五勺。

市街恢弘時代

内、御預地拾八坪七合五勺。寄進地九拾坪。年貢地三百五拾八坪。

一、當寺草創之義を、元和七辛酉歲羽州米澤東寺町ニ基立仕候處、慶安年中上杉彈正大弼様御思召ニより、御府内麻布今井村ニ引越罷有候所、承應三甲午年今井村御用地ニ被召上候故、其節之御奉行神保市右衛門信○氏様并ニ天野佐左衛門重○雄様御兩所々御證文申請、藤堂主馬様信○氏證文差上申候、同年麻布新町信○氏寺引越罷有候所、寛文元辛丑此度御用地ニ被召上、小出越中守真○尹様信○氏御渡し、只今之地信○氏引移り居住仕候。

一、御預地大門通り道幅九尺ニ裏行拾貳間半、坪數拾八坪七合五勺御預地、鳥居伊賀守様信○氏奉願上門作事仕候。

一、寄進地惣墓所門南之方地續坪數九拾坪之分、森川出羽守様信○氏御願申上候所、惣墓所ニ被仰付候。

一、境内御年貢地表口拾貳間三尺裏行北方四拾三間、南方三拾三間貳尺、東地尻六間三尺、此坪數三百五拾八坪。

——文政寺社書上

善心寺

善心寺 寺地寛文元年買得ス。

一、年貢當地三拾八年

麻布北日ヶ久保町並燒跡
本善寺末寺
法花宗 善心寺

從寺社方上ル帳ニ、卅五年と有レ之。

但、此寺地寛永八未年法花宗正城坊開基仕、寛永拾壹年より法花宗壽慶院罷在信○氏處、寛文元丑年より八年以來善心寺求置。

一、寺内七拾貳坪

一、門前町屋家數壹軒町役仕信○氏。

——地子古跡寺社帳

青原寺

青原寺 中興開基是年二月卒ス。

龍穩寺末曹溪山青原寺

青 山

境内拜領地二千五百坪餘。内門前町家在レ之。

起立之義を、何曆比ニ信○氏哉、延享二丑年二月類燒、諸記錄等燒失、由緒相分不申信○氏。

開山龍穩寺五世雲岡俊徳大和尚、永正十三子年五月十五日寂。

中興開基故青山信濃守幸方室、當時青山主水殿先祖青原院殿梅園宗白大姉、

萬治四丑年二月廿日卒。

——府内備考

大龍寺

大龍寺 牛込原町ニ起立ス。

甲州山梨横翠寺村興因寺末
牛込原町
禪宗曹洞派 起雲山大龍寺

市街恢弘時代

一、境内御年貢地南西二十二間。南北同斷。坪數四百八十四坪。

一、開關起立當寺前住林庵吞茂。

右寛文元年巳年致開關。

——文政寺社書上

清光院 四谷ヨリ小日向ニ移ル。

鎌倉五山圓覺寺派久喜甘棠院末
禪宗 小日向八幡坂 南榮山清光禪院

右當寺を鎌倉鶴岡八幡邊永安寺境内ニあり照姫爲善堤一庵ヲ文明十八年ニ建立。照姫を小栗氏平ノ助重公ノ妻也。法名天室妙照禪定尼。年號應永二子年八月日不知卒。其子二男重弘十二才ニあり出家號榮俊禪師。當寺之開祖也。寛永年中鎌倉鶴岡八幡邊ハ四谷仲殿町ニ引移申。其頃者南榮庵ヲ申也。年號不分其頃之中興開基功德主吉田典藥頭一庵娘法名清光院ヲ唱。ニ付、寺號ニ相用申。庵號ヲ山號ニ相用。由申傳。仲殿ニ相移。中興開山心空禪師、道德ノ人故開祖同様之中興ニあり御座。

一、古跡手貢地年代不知四谷仲殿町ニあり寺地被仰付、坪數三百坪餘、内十間三尺を御年貢地ニ被仰付由書留有之。得共、委細之義を相分不申。其後御用地ニ相成、當地小日向八幡坂ニあり先規之通り、寛文元年ニ古跡御年貢地ニ被仰

下、引移申也。

——文政寺社書上

天誓院

天誓院 寛文元年三月ノ起立也。蓮光寺寺中タリ。

蓮光寺略。中

一、寺中 二ヶ院略。中

一、天誓院 建立四十五坪。略。中

一、開基

右寛文元辛丑年三月、當時駿河臺松平與之助殿高祖松平右衛門大夫正綱殿奥方建立、當山五代目貞譽天誓上人、右奥方ヲ御兄弟ニ付、天誓上人御隱宅ニ御建立有之。貞譽上人爲開山、寛文四辰年五月十九日遷化、法名松蓮社貞譽上人、十阿天誓和尚、松平右衛門太夫正綱殿奥方、法名宗學院殿德譽壽清大禪定尼、延寶七未正月三日死去。

——文政寺社書上

真正寺

真正寺 淺草ヨリ下谷通新町ニ轉ス。

四ッ谷天龍寺末
下谷通新町 曹洞宗 神島山真正寺

古跡御年貢地 一、境内千四百三拾坪。

一、元地湯島御用ニ付被召上、淺草ニ替地被下、有故淺草寺地加藤出羽守殿ニ市街恢弘時代

相渡以後、寛文元年丑年淺草ヨリ當地に易地。

一、創草起立慶長十三戊申歲。

——文政寺社書上

迎接院 淺草誓願寺ノ寺中也。是年八月十六日ノ起立ニ係ルト云フ。

○誓願寺寺中

迎接院○中

一、坪數間口貳十七間四尺、西側貳十貳間半、然ルニ東北さし金之如く幾重も入込、

惣多三百三十八坪九合九勺餘。

當院起立之年、寛文元辛丑年八月十六日ニ建ト申事御座候得共、由緒書等ハ明和九辰年燒失仕、一向相分り不申也。

——文政寺社書上

寶壽院 正覺寺寮也。是年起立ス。

淺草黒船町

正覺寺○中

正覺寺寮舍 寶壽院

當院起立、寛文元年カ文政八酉年迄、百六十五年。

——文政寺社書上

惠然寺 赤坂ヨリ深川ニ轉ス。

惠然寺境内除地千八百坪。正覺寺の南ニ隣り、臨濟宗にて市ヶ谷月桂寺の末ふり。三聖山と號し、寛永十年の起立ふり。開山を別傳碩分和尚と云。別傳禪師行實略

惠然寺

寶壽院

迎接院

云、諱宗分字別傳、初名舜貞、後改碩分、房州人也。俗姓藤原氏、黒川、父名盛勝、房陽館山太守義弘家臣、黒川大隅是也。慶長三年戊戌十二月廿日生、投干武之大松舜鏡禪師、執弟子禮、薙髮披緇、年十有一也。正保之初、閑居干武之赤坂雲巖、々々狹陋不足、以納廣衆、寛文元年辛丑、遂移寺於深川、號蘆村寺、道力所致、堂宇速成焉。四年甲辰九月有故、改派料、撤洞門、投入濟水、易衣嗣法於武陵、月桂雪山和尚、寺亦隸、月桂之輪下、改芦村、號三聖山、慧然寺。寛文八年戊申、夷廿四日、寂年七十有一と。是ふり。

——葛西誌

惠然寺 萬年町ニアリ、三聖山ト號ス。市谷月桂寺末ナリ。モトハ赤坂ニアリテ不識山雲巖寺ト號シ、曹洞宗永平寺ノ末流ナリシト云フ。起立ハ寛永十年ト傳レトモ、舊地ヲ失ヒ事蹟詳ナラス。今別傳碩分ヲ開山トス。碩分ハ房州ノ人ニテ、里見義弘ノ臣、黒川盛勝ノ子ナリシカ、僧舜鏡ヲ師トシテ、薙染シ、正保ノ初、雲巖寺ニ住居セシカ、其地ハ狹隘ナリシニヨリ、寛文元年當所ニ移轉シ、蘆村寺ト改ム。○中境内千八百坪、拜賜ノ地ナリ。

——府内誌殘編

重願寺 轉移年月ヲ明カニセズ。今開山ノ寂年ニ因ミ、此ニ附記ス。

山城國京都惣本山知恩院末

淨土宗 不虛山當知院重願寺

重願寺

一、境內拜領地千四百餘坪。

開闢起立不分明。享保年中其後寛政二戌年正月廿二日、右兩度類燒之節古記燒失ニ付、申傳ハ元馬喰町ニ多草創有之、其後新大橋より一ツ目之間ハ替地ニ相成、其後御船藏御用ニ付、當地ハ替地被仰付ハ由、兩度共替地之義中興近譽上人代ト申傳ハ得共、年月相知不申ハ。

一、開山本蓮社願譽上人是哲和尚。

下總國人椎名氏、剃髮同國光泉寺嗣法、增上寺中興普光國師椎名之姓ハ、千葉家之末葉之由申傳ハ、寛文元丑年十二月七日示寂。

一、中興緣蓮社近譽上人玄阿和尚。

開山同國同姓ト申傳ハ、貞享元子年十月朔日示寂。——文政寺社書上

一乘寺 開山ノ寂年ニ因ミ、此ニ掲ク

一、拙寺儀去ル文化八末年二月類燒仕、其節古キ書物等不殘燒失仕候故、年曆巨細之義相分不申候、類燒有形之寫々御奉行所ハ追々作事仕度願上候節之繪圖面奉差上候。

一乘寺

房州小湊誕生寺末

麻布領飯倉町六丁目

日蓮宗

廣榮山

一乘寺

一、境內 御年貢地。

右惣坪數六百八坪半。

内、古跡御年貢地四百廿四坪。

内、御年貢地百八十四坪半抱屋敷。

天明六年十二月廿六日屋敷御改安部次郎兵衛様於御宅岸本閑盛方カ譲リ受候義被仰付候。

一、開山 大乘院大僧都日達上人

右萬治四辛丑年二月十三日迁化、當亥ノ年迄百六拾七年ニ相成候。

——文政寺社書上

惠雲院一妙坊 丸山本妙寺中也。開祖日相萬治四年寂ス。

日蓮宗勝劣派

丸山

本

妙

寺

略

中

表通西側中 惠雲院一妙坊

一、南北八間半餘東西拾壹間、此坪數九拾三坪半餘、家作坪數凡六拾七坪。

一起立之年代相分り不申候。

一、開祖本了院日相萬治四辛巳年三月十二日遷化、事蹟相知不申候。

市街恢弘時代

一一二九

惠雲院一妙坊

市街ノ起立シタル者若干有リ。

○文政町方書上。

市街起立 左ノ如シ。

神田堅大工町拜領町屋敷 文政町方書上柳原岩井町代地拜領屋敷書上ニ、左ノ如ク見ユ。

一、町内之儀を、不殘拜領地ニ有、拜領主姓名左之通、

間口拾壹間三尺、裏行貳拾四間貳尺、三寸八分。此坪三百拾五坪七合。

御腰物奉行支配御指御金具師御彫物師兼帶

安田又五郎

右ニ寛文元丑年中、神田堅大工町ニ有、町屋敷拜領仕、○下

下谷通新町 起立ノ年代ヲ知ラズ、寛文元年ノ割付ニ小塚原新町ト有リト傳フレバ、其頃市街ヲ爲セルヤ知ル可シ。今此ニ附載ス。

下谷通新町

一、寛文元年御割付ニ小塚原新町ト有之、其後元録八亥年御割付ニ下谷通新町ト御座候。右之年々町銘相改リ候哉、申傳無御座候。小塚原新町ト有之候間、右小塚原町ト掛合得キ穿鑿仕候處、右町内も先年類焼仕、古書物等過半焼失仕、御水帳ニも新町之儀無御座候間、相分リ不申候。其節之草分人壹人も無御

座候。町屋起立之年代相分リ不申候。并引地代地築立地新地等無御座候。往古村方ニ有之候節之申傳無御座候。

但、町内東側北角表間口廿八間地、尻幅廿八間五尺、裏行拾七間四尺五寸有之。通新町眞養寺地所明地之儀、萬治貳亥年運千山自性寺起立、寛永貳丑年下谷三枚橋廣布山眞養寺起立、然處元祿二巳年兩寺壹寺ニ仕候。從夫以來運千山眞養寺ト申來、年月不知、寺社御奉行脇坂淡路守○安様ニ御願申上、御年貢御傳馬而已相勤申候。尤御年貢御傳馬共通新町ニ有取立上納仕候。町内南角々三拾三間程北ニ寄、町並地尻貳反壹畝廿七步東裏屋敷ト唱申候。右地所之内、清福稻荷祠有之、持主仁平次地面内。同南角々七拾壹間程北ニ寄、八反五畝壹歩西裏屋敷ト唱申候。右地所之内、稻荷社壹ヶ所、靈神社壹ヶ所有之、持主公春院境内。右之内孫左衛門稻荷社壹ヶ所、秋葉社壹ヶ所、神明社壹ヶ所有之、持主山三郎地面内。右之内稻荷社壹ヶ所持主眞正寺境内。

一、町内里俗無御座候。野道字横町

西側石川主殿頭様大門道壹ヶ所、觀音堂横町ト唱候壹ヶ所、庚申横町ト唱

市街起立事
神田堅大工町拜領町屋敷

下谷通新町

候壹ヶ所。同彦右衛門横町ト唱候壹ヶ所。右彦右衛門横町ニ御鷹野三川嶋筋御成之節御通拔御道ニ相成申候。東側燒場道ト唱候横町壹ヶ所。西光寺横町ト唱候壹ヶ所。天神山ト唱候横町壹ヶ所。右天神山横町ニ三河嶋筋御成之節御通拔御道ニ相成申候。

元名主庄藏儀退役仕暫く名主無之罷在候處安永七戌年閏七月私祖父新兵衛被見立名主役町内一同奉願上候處願之通被仰付候已後私迄實子ニ多三代相續仕候。名主新兵衛。

一、町奉行御代官兩支配ニ多御代官平岩右膳。

一、反別六町壹反貳畝拾八步。

一、郷名武藏國豊島郡峽田領荒木田庄。

一、寺社領無御座候。

——文政町方書上

眞正寺門前

眞正寺門前 淺草ヨリ下谷通新町ニ移ル。

下谷通新町之内眞正寺門前

一、元地湯島御用地ニ付被召上淺草ニ替地被下有故淺草寺地加藤出羽守殿御相渡候後寛文元年丑年淺草ニ當地ニ替地仕候節門前町屋共相求候由申

戸崎町

戸崎町 餌差衆領受ス。

——文政町方書上

傳候。尤往古門前町屋惣家作御免被仰付候年代ニ記録蟲喰候故一向相分不申候。其後寛延二巳年三月類燒仕門前町屋燒失仕貧寺故間口拾間之處家作仕殘門前地ニ當分疊地ニ致罷在候并草分人無御座候往古村方ニ多有之候節之申傳無御座候。

一、町奉行御代官兩支配ニ多御代官平岩右膳。

一、反別壹反六畝拾九步。

一、郷名武藏國豊島郡峽田領荒木田庄。

戸崎町○中

一、町内起立之儀ニ往古々小石川村之内元和年中傳通院領ニ御座ニ處御用地ニ被召上寛文元年之頃御鷹匠頭小栗長右衛門様御組篠崎佐兵衛様海方新助様右御兩人之御組下御餌差衆御領地ニ相成○中。——府内備考

東西古川町 是年起立ス。

東西古川町

一、町名之起草創人之名相分不申。右町之儀ニ寛文元子年中町屋被仰付○中

市街恢弘時代

東西古川町

略。

一、町内東西南之方四拾壹間貳尺、北之方三拾九間、南北東之方六拾壹間、西之方六拾間四尺。

但、兩側町屋ニ多、道幅間數相除申シ、道造之儀也、町内一手持ニ御座シ。

一、四隣 東之方牛込水道町、西之方西古川町、南之方牛込改代町、北之方江戸川向小日向水道町。略。○下

西古川町

一、町名之起草創人之名、相分不申シ。右町之儀也、寛文元丑年町屋被仰付。略。○中

一、町内東西南之方廿五間、北之方三拾三間、南北東之方八拾四間半、西之方九拾貳間半。

但、兩側町屋ニ多、道幅間數相除申シ、道造之義也、町内一手持ニ御座シ。

一、四隣 東之方東古川町、西之方松ヶ枝町、小日向村田地、南之方牛込行願寺領畑地、北之方江戸川向水道町。

——府内備考

清光院門前

清光院門前 四谷ヨリ小日向ニ移ル。

清光院門前

一、清光院之儀也、元四ッ谷仲殿町罷在シ處、寛文元丑年中、當時之場所ニ引地被仰付、境内三百坪餘之處、有來之通、右地所之内四拾四坪餘之處、門前町家作御願申上、家作建來。略。○中

一、町内東西南之方五間、北之方六間、南北八間。

但、片側町ニ御座シ、道幅三間有之。道造普請之節也、往來半分町内持ニ御座シ。

一、四隣 東之方清光院境内、西之方智願寺門前、南之方清光院境内、北之方龍興寺境内、妙足院境内。

一、坂 登凡壹町程。幅凡三間程。

右ニ門前通カ北之方有之、往古八幡坂ヲ唱申シ、尤其節右坂上左之方只今久世長門守様小日向町畑地御抱屋鋪場所之内、田中八幡宮有之ニ付、里俗八幡坂ヲ唱シ處、年代不知、右御抱屋鋪相成シ後、社地ヲ音羽町八丁目裏通り相移リ申シニ付、坂下東之方妙足院境内ニ大日堂有之ニ間、其後里俗大日坂ト相唱申シ。

但、坂道造之儀也、右之方久世長門守様、北之方龍興寺妙足院ニ多、道造イ

あしひ。

自證院門前町家

自證院門前町屋 是年起立ス。

自證院。○市ヶ谷。

一、門前町屋

御代官御支配所。御年貢上納。 持添地。

但、表門通ニ多片側町。表間口六拾七間貳尺五寸。上下ニ多空地八尺ツ、裏行下之方六間。中程ニ多四間半。上之方八間。此坪數三百餘坪。

右門前地之儀ハ、寛文元年御靈屋爲御掃除且非常從千代姫君様御寄附町並之家作ハ寛文元丑年ニ御座候。

——文政寺社書上

自證院門前

一、當町往古之武州豊島郡市ヶ谷村之由。其頃々百姓町家御座ハ處寛文元辛丑年自證院建立之節、當時門前百姓地ヲ尾州様ニ多御買上ニ相成、自證院殿御墓所爲御掃除役、御寄附被成由。

——文政町方書上

御手大工町

御手大工町 寛文元年本所北横堀ニ起立ス。

御手大工町坂。○赤

一、當町之儀ハ、御手大工衆貳拾五人分之大繩拜領町屋敷ニ多、元本所入江町

——府内備考

相生町五丁目

續ニ多、北横堀と申所町屋敷ニ拜領仕罷在ハ處、御用地ニ罷成、天和元亥年七月中爲代地青山大膳亮様上ヶ屋敷拜領仕ハ、町屋之儀ハ寛文元年々之町屋ニ御座由。○下

——府内備考

相生町五丁目 一部茶屋長意領受ス。

相生町○本所。○中略。

五丁目ハ、寛文元年當所ニテ四百坪ノ地ヲ茶屋長意ニ賜ハリ、○下

——府内誌殘編

相生町五丁目

一、町内起立之儀ハ、東角表間口京間貳拾間、坪數四百坪之場所ハ、寛文元丑年茶屋長意拜領地ニ相成由へ共、其砌ハ町名何ト相唱申由哉、相分リ不申由。○下

——府内備考

是頃、府内各所ニ新道ヲ開ク。○玉露叢

新道 是頃、府内各所ニ新道ヲ開クト傳フ、下文寛文二三年ノ條ヲ參照ス可シ。

亦復興施設ノ一ナル可シ。

同年○寛文元年。ニ、江戸中ノ町々ニ新道出來ル。

——玉露叢

市街恢弘時代

新道
新道事蹟

寛文二年三月、江戸町々ニ新道をハして大道の廣さハ六間ありしを往來ををつくらる。

——江戸紀聞

附記

〔附記〕 町觸

一、町中ニ多子供道中の繩を張、往行之障ニ成候由、左様之儀不仕候様銘、子供の急度可申付旨、町中家持ハ不及申裏、迄入念可被相觸候、少々油斷有間鋪候。以上。

正月六日〇寛文二年

——撰要永久録書上

本所鎮守宰府天神社

二年壬寅〇寛文二年二月十九日癸亥〇癸亥三宰府天神社〇武藏國東葛飾郡

ヲ天神橋〇市内東一町ノ地ニ遷シ、本所〇市内ノ鎮守ト爲ス。〇葛西志

新編武藏風土記稿

本所鎮守宰府天神社

本所鎮守宰府天神社 寛文二年二月十九日宰府天神社ヲ天神橋東一町ノ地ニ遷シ、翌三年ヲ以テ社殿以下ヲ營造スト云フ。府内ノ江東進出經營、斯ニ一段落ヲ成セル者歟。

龜戸村〇武藏國葛飾郡中略。

天神社 東宰府天滿宮ト號ス。配祀二座、一ハ天保日命、一ハ祭神詳ナラス。社

記ヲ閱スルニ、當社造營ノ來由ハ、大宰府ノ神職菅原善昇十八世ノ孫、大鳥居

信祐ト云者常ニ天滿宮ヲ崇信スルノ淺カラス、或夜ノ夢ニ、カウタチテ祭ル梅ノ若枝カナト云連歌ノ發句ヲ得タリ。又別當職信兼モ同シ夜ニ靈夢ヲ蒙リ、同シ發句ヲ神託有リシカ、夢寐ノ間宮殿ノモトニ坐シケルト覺へ、御簾ノウチヨリ直垂ノ御袖アラハレテ、カノ發句ニイヘルカウタチテノ五文字ハ、十立テト書ヘシトノ御告アリシト見テ夢ハ覺タリトソ、是正保三年ノ事ナリトソ。信祐此靈夢ニ感シ、頓テ天滿宮ノ愛シ賜ヒシ飛梅ヲ以テ神體ヲ彫刻シ、社ヲ建立シテ遷座シ奉ラントノ志願ヲ起シ、諸國ヲ巡歴シテ天滿宮ノ社ヲ造立シ、或ハ荒廢セル社ヲ再建シテ、カノ靈夢ニ依テ彫刻セシ神體ヲ鎮坐スヘシト思ヒシカト、神慮ニカナハサルユヘニヤ、造立セシ社モ多カリケレト、トカクシテ其意ニ滿リトオモフ地モアラサリケリ。其後終ニ江戸ヘ下リテ此村ノ中程ニ有シ天滿宮ノ小祠ヲ修造シテ、カノ神體ヲ遷セリ、時ニ寛文元年八月二十三日ナリ、是ヲ元宮天神ト號ス。其地ハ今ノ社地ヨリ東ノ方ヘ六七丁隔リタル所ナリ。今ハ社モナクテソノ跡ハ僅ノ除地ナリ。コレヲ天神舊地ト號セリ。然ルニ彼元宮天神遷座ノ後、同シ年ノ内ニタマ々々台命ア市街恢弘時代

リテ、本所方一里ノ地ヲ開カレ、武家町家ニ賜ハリテ居住ノ地トセシメタマヘリ。其時築地ノ奉行徳山五兵衛・山崎四郎左衛門ナリシカハ、信祐アリツルコトトモヲ彼二人ヘウツタヘシニ、翌二年二月十九日松平伊豆守信綱・久世大和守廣之指揮アリシハ、此社新地ノ鬼門ニモ當リタルハ何ノ幸カシカンヤ、此後當所ノ鎮守ト定ヘシトテ、今ノ社地ヲ賜ヒシニヨリ、同三年神殿以下反橋心字ノ池ナトニ至ルマテ、悉ク太宰府ノ社ニ擬シテ作りナセリ。此年八月祭禮ノ儀式行ハレシモ、又太宰府ノ例ニナラヒテ神輿ヲワタセリ。同九年六月信祐上京シテ、前大納言菅原豐長卿ニツキテ當社ノ圖ヲ後水尾法皇ニ奉リシカハ、時ノ帝ノ叡覽モ有シトシ、頓テ法皇ヨリ菅神尊號ノ宸筆ヲ賜ハレリ。同七月十八日信祐新院ヘ參リテ御簾近ク候シテ、當社ノ縁起ヲヨミテ叡聞ニ達セシカハ、御感斜ナラス、官女出羽局ニ勅有テ御冠服ヲ賜ヘリ。其後元祿十年九月二十五日豐長卿命ヲ傳ヘテ、仙洞ヨリノ御免狀ヲ下サレケル。其文ニ、武州江戸本所天滿宮ハ、奉准筑前國太宰府天滿宮之地也。依之菅家之輩諸事執奏、尤一社ノ神事法令或祭禮之砌、別當可乘車類同太宰府之社例云々。同十二年、翌年辛巳ハ菅神八百年ノ神忌ニ當レハトテ、祭禮ヲ行フヘキノ

本所宰府問答

東京龜戸神社所藏

上中下三卷、寶物帳ニ昌億書トアリ。内二箇所ヲ撮影ス。

ヲテ本所方一里ノ地ヲ開カレ武家町家ニ賜ハリテ居住ノ地トセシメタマ
 へリ其時築地ノ奉行徳山五兵衛山崎四郎左衛門ナリシカハ信託アリツル
 コトトモテ彼二人ヘタツタヘシニ翌二年二月十九日松平伊豆守信綱久世
 大和守廣之指揮アリシハ此社新地ノ奥門ニモ當リタルハ何ノ幸カシカン
 ヤ此後當所ノ鎮守ト定ヘシトテ今ノ社地ヲ賜ヒシニヨリ同三年神殿以下
 反橋心字ノ地ナトニ至ルマテ悉ク太宰府ノ社ニ擬シテ作リナセリ此年八
 月中三祭實時神ニ昌勸書イテ内二箇祠ニ擬シテ月祭禮ノ儀式行ハレシモ又太宰府ノ例ニナラヒテ神輿ヲワタセリ同九年

六月本祀幸瀬間大納言菅原豐東兼白幡指圖ヲ後水尾法皇ニ
 奉リシカハ時ノ帝ノ詔覽モ有シトシ頼ヲ法皇ヨリ菅神尊號ノ宸筆ヲ賜ハ
 レリ同七月十八日信祐新院へ参リテ御座近ク候シテ當社ノ縁起ヲヨミテ
 報聞ニ達セシカハ御威斜ナラス官女出羽局ニ勅有テ御冠服ヲ賜ヘリ其後
 元祿十年九月二十五日豊長卿命ヲ傳ヘテ仙洞ヨリノ御免狀ヲ下サレケル
 其文ニ武州江戸本所天満宮ハ奉准筑前國太宰府天満宮之地也依之菅家之
 縁諸事執奏无一社ノ神事法令或祭禮之調別當可乘車轎同七等所之款例云
 云々



かめど

原寸 縦八寸 横七寸五分

東京 龜戸神社所藏

此紙者古大佛林傳圖卷之末白者
依原寸子加し題号者

諸本かめとハ、龜戸天神社別當第二世信圓述フル所、觀世太夫織部章句ス。信圓ハ寛保六年辛丑六月十五日年七十八ヲ以テ歿ス。

かめど

原寸
縦八寸
横七寸五分

東京 龜戸神社所藏

諸本かめとハ、龜戸天神社別當第二世信圓述フル所、觀世太夫織部章句ス。信圓ハ寛保六年辛丑六月十五日年七十八ヲ以テ歿ス。

諸事... 寛政六年辛丑六月十五日... 藤本... 天輪... 二冊... 東京... 輪指... 御...

東京... 輪指... 御...

此... 御... 天輪... 御... 御... 御...

御... 御... 御... 御... 御... 御... 御... 御... 御... 御...

此... 御... 御... 御... 御... 御... 御... 御... 御... 御...

御... 御... 御... 御... 御... 御... 御... 御... 御... 御...

御... 御... 御... 御... 御... 御... 御... 御... 御... 御...

諸事... 天... 御... 神...

天... 御...

東京...

天... 御... 神... 天...

天... 御... 神... 天...

此... 御... 神... 天...

松... 御... 神...

天... 御... 神...



ム子内裏へ奏聞セシニ同九月三日仙洞(靈元院)ヨリ神詠ノ宸翰ヲ賜ヘリ。中務大輔菅原長時卿ノ添狀アリ。ソノ文ニ來辛巳於本所社執行聖廟八百年御忌祭禮、依舊貫奏請仙洞勅筆、時以御信心不淺被成下宸筆神詠誠當社末代無上御神寶也。安置社内奉禱禁裏院中御安全武運長久者也云云。斯内裏ニテモ御信仰不淺ニヨリ、神威日々ニイテシルシク、年ヲ追テ繁榮ノ地トハナレリ。是ヨリサキ延寶五年二月十二日嚴有院殿御遊獵ノツイテ、台駕ヲ枉サセラレ御拜有シヨリ、打續テシハ々々渡ラセラレ、享保五年西連歌屋ノ邊へ御茶屋マテ建サセラレシニ、延享二年二月五日ノ回祿ニ罹リテ、宮殿、回廊、墩門、末社、御茶屋ニ至ルマテ悉ク烏有トナレリ。同四年金若干ヲ賜ハリテ本社墩門、末社ノ類ハ元ノ如ク作ラシメラレシカト、御茶屋ハ御再建ナカリシユヘ、ソノ跡へ西連歌屋ヲ建タリトソ。此連歌屋近キ頃廢シテイマタ再造ナラス、當社祭禮八月廿五日秋祭ト號シ、昔ハ每年神輿ヲ渡セシカ、今ハ中絶スト云。此餘正月元日ヨリ七日マテ一七日ノ祭、二月二十五日ノ春祭、四月朔日ヨリ七日マテ雷神祭、同晦日御衣祭、六月朔日供氷餅、同二十五日御後、七月七日七夕宴、九月十三日月見宴、同晦日御衣ノ祭、十一月二十五日火燒祭、又節分ノ夜追

儼ノ祭式アリ。是皆太宰府ノ例ニ倣ヒシモノトイフ。○中略。
 別當東安樂寺 天原山聖廟院ト號ス。開祖ヲ大鳥居信祐トイフ。コノ人ハ太宰府天滿宮ノ別當。菅家八世ノ孫式部少輔菅原善弘カ男善昇後剃髮シテ大鳥居信貞ト稱ス。十八世ノ孫ナリ。寛文中江戶ニ來リ。當社ヲ造建シテ別當職トナレリ。事ハ前ニ辨セリ。寛文九年正月十一日柳營御連歌ノ時信祐連衆ノ數ニツラナリシヨリ。子孫年毎ノ御會ニ出座ス。信祐ハ元祿十五年五月歿ス。

新編武藏風土記稿

龜戸村 ○武藏國葛飾郡。○中略。

宰府天神社 社地三千四百四十六坪。内除地二百六十六坪。年貢地五百六十六坪。 天神橋を以て東壹町餘あり。社記抜閱る。當社造營の來由を、太宰府の社職菅原善昇が十八世の孫大鳥居信祐といふもの、常に天滿宮を崇信せる事淺からざりしが。○中略。 終に江戶へ下りて此村の中などより有し天滿宮の小祠を修造して、かの神體を遷せり。時、寛文元年八月廿三日あり。是を元宮天神と號し。その地ハ今の社地を以て東の方へ六七町隔りたる所あり。今ハ社もふくて、その跡ハ僅の除地あり。去きを天神舊地と號せり。然るよかの元宮天神遷座の後、おふじ年の内ふたまた

ま台命有て、本所方一里の地を開かき、武家町家と賜りて居住の地とせしめ給へり。その時築地の奉行ハ、御旗本の士徳山五兵衛山崎四郎左衛門ふりしかど、信祐ありつる事どもを、かの二人へ訴し、翌二年二月十九日時の執政松平伊豆守信綱、久世大和守廣之指揮ありしハ、此社新地の鬼門も當りたるハ何の幸うまかんや。此後當所の鎮守と定べしとて、今の社地を賜へりしよを以て、同三年神殿以下反橋心字の池ふどよ至るまで、とくく太宰府の社と擬して作りおさせり。此年八月祭禮の儀式行はれしも、ま太宰府の例よふらひて神輿をわよせり。○中略。

- 三ノ橋 惣門の内心字池に架せり。長六間高七尺餘の反橋あり。
- 二ノ橋 おふじ池の中央に架せり。
- 一ノ橋 こきもおふじ池の北の方より架せり。以上の三橋ハ、寛文中始て造營せといへり。○中略。

別當東安樂寺 社地の東北より居住せ、天原山聖廟院と號せり。開基を大鳥居菅原信祐と云。家系を閱るよ、信祐ハ菅家八世の孫式部少輔文章博士從四位菅原善弘の嫡男善昇が十八世の孫なり。

按よ、太宰府天滿宮故實云、神廟を建られしその始ハ、太宰の帥とある人祭り

任をたかきとされ、その後菅原氏勅をうけてかゝる御社の別當とふり、七年を以て信やけのみとの祭に西府より下り、社職をたつと死祭をたつとをせり。後、祝髪の子孫相傳ひて今に、寛文年中當社の別當職となり、延寶二年二月十七日○中權律師法橋に任じ、同七年八月三日權少僧都法眼、天和二年十月十六日權大僧都法印に任じ、元祿十五年五月寂せり。こゝをいひて寛文九年正月十一日柳營に於て御連歌御興行の時、台命をかふぬりて信祐御連衆の數にたらふせり。まかしてより後、子孫代々御連衆に命ざられて、年ごとの御會に出座○中と云。略。

春祭 二月廿四日の夕を、通宵連歌を興行し、翌廿五日午の刻神事を始む。夜に入て燎菝もやし、音楽をかふでつゝ、神體を奉じて社地を巡行せり。此日ハ菅公薨し給ひし日ふせり、御葬送の遺式をかゝとせり。年中の最大法會也。寛文四年始て此神事執行ひしを、今に至るまで年ごとよおこたら○中と云。略。

秋祭 八月廿二日と、同廿五日までの祭儀あり。先づらかじめ廿一日の夜、神體を神輿に遷し、翌廿二日の曉、堅川岸ふる旅所社に遷輿せしを、こゝに二

日滯留有て、廿四日更に淨妙院の前に遷輿、淨妙院ハ、榎寺藥師堂の事也。○中略。 榎れを、堅川大路を西へよぎりて、兩國元町に至り、こゝに又まバシゲなど神事有て、夜をこゑて歸社有り。翌廿五日ハ本社に於ての祭儀あり。社記を閱るに、秋祭ハ大江匡房卿太宰府の都督たゞし時、康和三年はじめて執行せしよりおこれりと、當所よてハ寛文三年を始とし、其の後比年の例祭とふりしを、延享丙丁以來中絶せといへり。○中略。

旅所除地五百三十九坪。内道を隔て北の方四百二十坪。南の方百十九坪。 本社より南へ六七町隔りて、堅川大路のうち、北松代町四丁目の中不どにあり、祭儀の時神輿の旅宿ある地ふれどかく唱へり。

假殿 往還の北の方に有、寛文年中の造立よて、その比ハ眷屬社攝社をも建たゞしが、寛政二年火失して、再建未だふらば。

薬師堂 假堂に向て右の方に有、榎寺と號せり。又淨妙院とも稱せ、寛文年中の造立にて、始ハ往還の南の方に建とゞし、是も寛政二年の回祿よかゝりて烏有とふり、其の後今の所へ移せり。太宰府天満宮故實よ云、淨妙寺淨妙院の事なり。ハ天神のおはしまし、参る地あり。治安の都督惟憲卿、かの跡菝かふしと

て、一ツの伽藍を建ふる。淨妙寺今ハ榎寺と號じと、是也。太宰府社傳云、菅公左遷の時、榎寺の邊よて、日ハ已ヨ夕暮ヨ及びたゞしかど、御舎いまだ定らさざり。孝忠バ、ひとつの賤ガ家ヨ立よらさ給ふ。主の翁の云く、左遷の御身に座せバ、御舎ハふゞがとすと。妻の老婆これを御いよハしくおもひ奉り、かの翁の言葉をおしとゞた、と。この家ヨ案内し奉り、とびつらうへヨ新薦を敷て御座とふし、麴飯を松の葉のさて進進參らさしうバ、おろざしを松の葉ヨ包と仰ごとりしと。その後靈夢ヨ、翁を縛り、婆を頓宮明神ヨいよひたるさま見えしとふん。故をもて今も毎歲秋の祭儀ヨ、神輿を榎寺淨妙院の前ヨそへて拜禮ありと。今當所よてもこきを擬して、秋祭の前日、淨妙尼の像を此藥師堂へ移し置て、拜禮ありといへり。○中略。

社傳考異

江戸志ヨ、明曆記を引て云、明曆年中本所龜井戸へ、社僧菅原信祐宰府の天神を勸請し、毎月笠着の連歌并誹諧ありと。按ヨ明曆年中と云事、甚疑ふべし、恐くハ後人傳寫の誤あるべし。

事蹟合考云、筑前宰府天滿宮の社司の一族、大鳥居菅原姓何某、孝の初ハかの

國主黒田家ヨ輕く勤て有し、心中ヨ深くおもひ入しハ、何とぞ大宰府天滿宮を江戸に勸請し度と、ひとへに發起し、遂ヨ天台の僧とふり、信祐と號し、東叡山ヨ入て、本坊の承仕法師とふる。かくて寛永年中の比、親しき武士町人等のおとふしき輩ヨ語て云、某元來各ぞんじらるゝごとく、太宰府天滿宮の氏人たるにとり、何とぞかの本宮を江城の下ヨ勸請申たき念願、心中に徹し、年を経ハ處、此など正しく御當地ヨかの御降臨あるへき靈夢の御告あり、そのゆへハ、龜井戸村その所ヨ、古來ヨ我を勸請し、纔の地松樹のもとに小社あり、是を當村名主ガ門をヨ一町ぞかりふわづらの芝地あり、その所ヨ梅樹三株あり、かの小社をこヨ移して、勸請せべしと、夢の告ありしと、かヨり々れど、何れも寄異のおもいをおしぬ。かくておのゝその所ヨ至り、先龜井戸村名主勝田氏ヨそかきり、まうるふかの地ハ、百姓伊兵衛ふるものゝ家の前ふれど、これヨも孝の事を語りてはうりしかぞ、そヨやかようけがひとともも此所へ小社を移せり。是今の本殿の地あり。その小社の跡ハ、今の梅屋敷の路次のかと、はらに、古松二三株あるもとに祭れり。これを天神のふる社の跡とて、纔の除き地古來のまゝにあるあり。祠ハ、此説誤れり、梅屋敷の

信祐東叡山の御門主へ願ひしハ、本庄龜井戸ハ昔々天神の古社ありとモ、これを取立て、太宰府の宮の體をうつし申度ハ、所のものも得心仕、再興あらバ、いづも情入申べきよし申ハ、何とモ、公の御免許あらんことを乞ひ奉るを願ひしかど、速ニ仰たてテ、ことゆへニ、御免許を蒙りしうニ、まづかの伊兵衛ふるもの、地面をかひ得、その外西の方の葭沼をも次第にかひとり、筑紫太宰府の御宮地のこゝろを移し、心字の池を堀、樓門を揚、不レ本宮のさほニふハきり、まかるニ、信祐此宮造立の初、公の宮祠結構の圖を版行シて、江戸中武家町家をいハぞ賦りて勸化したリ、公の圖元祿の初の頃までハ、番町邊の武家ふど多くもちたり、是ハ屋敷ノへ賦しゆへニ、ふり、公の身は毎日兩國橋の東、此際ニ、むしろを敷、古き机の上ニ、かの御宮の造營の繪圖を置テ、往來の諸人を勸勉たシ、此建立の事、寛永ノ文ノ誤ノの中、比感應有て、終ニ東安樂寺と云寺號をふし下さる、且信祐權小僧都ニ任ざらる、筑紫本宮の例ニ任せて、妻帶法印ふり、信祐もとニ連歌も心得たキ、寛永二年の比、上京して、聖廟七百六十年遠忌追福として、菅家の人ノハいふニ、およハび、竹内滿珠院、梶井圓融院、等の御門主の發句を申請、一百韻の連歌を興行セと云々。

信祐かの心字池の西岸に一亭を作る、尤水上ニ作リ出シて、座しテ、ふらニ鯉鮒の數千およくを見、まニ、公の池ニ、かけたる木橋のもとニ、水上一圓ニ、藤をモ、そレハニ、たニ、花の盛の壯觀いふニ、かニ、然るニ、大猷院殿御成の時、此、按、又誤れ、猶社傳と合を見るべし。此亭へ御立寄あり、それより世々の將軍家ハ、御足をとリ、めらる、有徳院○徳川吉宗、享保中御成あリしニ、此天神宮の池の水亭、御膳所とあリしゆへ、終ニ御普請をも命ざられ、南北の岸へつニ、廣ニ、茅結構ニ、されしが、是も延享三年の回録ニ、鳥有とあリたリ。

關宿傳記、城内鎮守天滿宮の條に引テ、云、龜戸村東安樂寺宮社建立之由來、明曆三年、羅回祿之變、武陽御城及ニ、炎上、依之、久世大和守廣之御經營、惣奉行御側の勤ニ、利仰付られ、淺草川の向本所ニ、御普請小屋出來して、自諸方運送、虹梁材木如山堆、大工諸職人、人夫等ハ、無限群集して造營あり、以上の説甚疑ふへし。追日武陽繁昌ゆへ、武士屋敷不足なニ、本庄ニ、於て縦横ニ、堀をニ、運送の便よく、武士屋敷町屋等出來し引移スる、奉行徳山五兵衛、山崎四郎左衛門、仰付られ相勤られしニ、大和守爲巡見、右兩人を相伴ヒ、本所ニ、至り、龜戸村郷長太郎右衛門を召出し、申含らニ、是の新地ニ、鎮守社建立し、參詣の貴賤往

來絡繹たる時ハ所も自然と繁昌し、炊烟も賑ふたをし之。神ハ人の敬よ依て威を増し、人ハ神の徳よ依て運を添へ、日本神國の遺風あり、此邊よ神社の舊跡あらば建立し祭祀を執行ひ可然と、兩奉行と相談有し所ふ尤同心あり。太郎左衛門畏り申上々るハ、あきに見えぬ禿倉の天神の舊跡よて、民間の者ども尊崇仕いと委細よ申々れど、大和守きく届執政へ相達せられ、七十間よ四十間餘の地、諸役免許除き地よ成し、此地よ宮社建立し、菅原鎮座し、まほべし、別當ハ上野御門主へ申上、仰付られぬ様よ可奉願、尤其旨我等方を可申達之と郷長よ申付られ、則奉願ハ所ふ、筑州太宰府天神の社人の一類大鳥居三郎右衛門出府して、御門跡へ拜趨せしむるゆへ幸よ仰付らば、菅原信祐と號し別當と成て盡丹誠、建立宮社、日々繁榮し、太宰府の社人と心を合せ、緣起神寶も出來し、造營の神社宰府を摸し、東安樂寺と稱し、堂上方菅神の苗裔高辻殿初信祐よ心を添られ、密よ叡聞にも達し、神光日々ニ新之。上棟の札ハ久世大和守并よ徳山五兵衛山崎四郎左衛門三人記したる由、信祐申達々る。扱又太宰府の國守たる故、松平右衛門佐光之尊崇ありて拜趨、雄劍真太刀寄進等度々之。連歌座敷を造作し、泉水遣水游魚多し、參詣の輩群集し、無比類佳

景目を驚かしたる。執以の列久世大和守土屋但馬守を招請し、連歌座敷よ於て饗應ありしよ、その支度ハ右衛門佐光之より助成之。扱大和守寛文三年癸卯八月執政よ補られ、翌年四月廿五日加祿二萬石拜領。同九年六月廿五日總州關宿城地一萬石加祿拜領。延寶七年己未六月廿五日卒し、菅神延喜三年二月廿五日太宰府よ於て薨給ふ。依之信祐申々るハ、東安樂寺ハ和州君御草創同然なり、菅神感應ほし、て加護ありて、廿五日毎よ吉事あり、終焉の日も同日よ相當る事不可測の靈驗と折々申出々る。關宿城の鎮守ハ菅神を祭り、二の丸よ社有て天神郭と云。菅神御自筆の影像を寫し、並よ緣起一軸信祐かの社へ奉納し、大和守正直の頭を照し、冥加ある符を顯し々る。右の緣起天神別當關宿臺町昌福寺へ、菅の時の寺社奉行中川甚五左衛門より相渡し、今よかの寺よ有と。菅の奥書よ云、欽惟筑前國太宰府天滿宮者、往昔仕延喜聖主預聞萬機、施仁政干民、薨後現神、神威照四海、及于今世、上從一人下至萬民、無不欣渴仰首。粵征夷大將軍源家綱公當御治世、天下尙安全、而人民誇淳素化浴至治澤、武門日繁昌、而江城之地狹隘也、是故執政從四品拾遺源廣之朝臣、蒙鈞命開築下總國本庄之地、令營作家屋矣。嗚呼廣之朝臣其器寬厚、而出預國家政、入而

明三教之道、頗以菅神出世矣。某生千載下、偶爲菅氏末流、遷坐聖廟于關東、而冀奉祝國家安鎮有年、幸於彼新邑、賜一佳境、造建宮殿、構紺園、樹林翁鬱也。終萬治二年、奉勸請神靈、而號東安樂寺。是併因太守之恩顧也。某參內院參、而奏達微心、成功、有叡感、被任叙法橋律師矣。一日、菅家嫡流亞相知長、黃門爲庸、參議豐長、拾遺在庸、與相謀而作爲緣起矣。神靈自畫之御影、有故將軍家爲寶物、每歲孟春於營中、掛連歌之席、竊蒙免許拜寫之。爰和州太守有勳功、而增祿、去寬文九年、賜總州世喜宿城、郭內有天滿宮、素崇爲鎮守矣。因茲緣起、自畫之御影書寫、奉納彼社、而太守之後裔所奉、祈繁榮之無窮也。延寶二年甲寅霜月吉日、東安樂寺天滿宮別當大鳥居律師信祐。

以上三書、載る處とふ今の社傳と合はせ、もしくは傳寫の時年月を誤せるよや、姑く勘考の爲、まの全文をこゝにまゐるをす。
——葛西志

一、明曆年中ニ下總ノ内本所へ宰府ノ天神ヲ勸請ス。社僧ハ信祐坊是元祖タリ。毎月笠着連歌并ニ笠着誹諧ナリ。
——玉露叢

寛文三年の條。龜戸天滿宮今の地へ營建、樓門、心字の池、反橋等成。此年八月祭禮、神輿行に習ふて、本所の地を巡行す。梅翁句集に、本所安樂寺の新らたに成たる時、新地にもかくなるものか梅の核の。
——武江年表

大災而還數年ニシテ、寛文ノ初ニ入ルヤ、復興事業ノ最大施設タル江東ノ拓開略成リ、士宅商肆ノ移置開始セラレ、恢弘江戸ノ基礎斯ニ立ツ。

按スルニ江戸市街ノ恢弘ハ、災後經營纔ニ了シテ、一旦本所ノ撤退ト爲リ、眞ニ江左ニ進出シタルハ、元祿中ノ事ニ係ルト雖、天和ノ本所撤退ハ、事實貞享元年ヨリ四年ニ至ル三年間ニ止マリ、元祿ノ再進出ト共ニ、依然舊規模ヲ襲用シタルノミナラズ、寛文二年ニハ、町奉行ノ管域ノ弘張ト爲リ、市政ノ整理ニ著手ス。世ハ漸ク都市充實ノ氣運ニ轉セルヲ見ル可シ。故ニ今姑ク江戸府發達ノ段落ヲ本所市街建置ノ日ニ劃スト云フ。

〔參考〕 風俗ノ變

戰國簡素ノ俗、大災前後纔ニ存シ、災後ノ復興經營成ルニ從ヒ、滔々トシテ華侈風ヲ爲スニ至ル。大災ハ雷ニ江戸ノ都市恢弘時代ヲ充實時代ニ轉スル一大轉機タリシノミナラズ、素樸ナル三河武士ヲ輕快ナル江戸兒ニ變スル劃世期ニシテ、江戸ノ都風ハ此ノ間ニ漸ク涵養馴成セラレタルヲ見ル。

井伊掃部頭直孝大坂冬御陣ニ物見二人ヲ出サレシガ、雨ニヌレテ歸リケ

リ。様子ヲ聞カレテ後刻着ラレタリケル小袖ニツヲヌキテ兩人ニヤラレケリ。サテ安藤帶刀方へ小袖ヲモラヒニ遣ハシケル、我等加様ノ事ニテ着ルモノニツナガラ家來ニツカハシ、着替コレ無候トテ、帶刀ヨリオクラレシ小袖ヲキテ、草袴ニテ神君ノ御前へモ度々出ラレシトナリ。或老人ノアリシガ、戰國ノ時衣服モ質素ナル事論スルニ及バズ、瀧川左近一益關東ノ管領トシテ、厩橋ニ到ルニ、諸將對面ノタメニ來リシ時、只今一ツアル衣服ノ垢付タルヲアラヒタレバ、アカ裸ニテ候ホドニ暫ラク待テ玉ハレト云ヒシ事語リツタヘタリ。直孝ノ衣服ヲ物見ノ者ニ遣ハシテ着替ノナカリシト符合シタリ。其後泰平ニ及ヒテ漸衣服モ美ニナリシカドモ、寛文ノ頃マデハ猶戰國ノ遺風アリテ、金銀利倍ノ物語リハ士ノ恥ト心得テセサリシ事ナリ。酒井雅樂頭忠清大老タリシ時、殿中ニテ春ノ末ツ方ノ事ニヤ、下ニ着タル服ノ汗ニ濡タルヲ休所ノ欄干ニカケテ乾シケルガ、所々ツギ當タル見苦シキトテ歸ラレケル。其事司サドル老女ノ聞テ、時移リ候ヘバ君ノ奢リ玉フニコソ、我等ガ一生ノ中ハ只今迄ノ如クナラント云ツルト也。是ハ嚴有院様御代ノ事ナリシ。古ノ武士ハ大ヤウ無様ノ奢侈ヲハブキテ、

用ユベキ事ニハ吝ナラザリケリ。關ヶ原御一戰ノ後、成瀬吉右衛門居間ノ天井ニツリ置テ、客ノ來レバ是ヲ指テ、アレ見玉ヘ物ヲ調達セヨトテ、隼人正ガ方ヨリ贈リタル金ナリ、是ヲミレバ美味ニモマサレリトゾ語リケル。大坂冬御陣和平アリシ後、隼人正ガ子二人アリ、祖父ノ所ニ來リケレバ、今度ハ無事ナレドモ久シカラズシテ事有ベシ、其時ニハヨキ馬ニ乘テ武功スベシ、江戸廣シトイヘドモ金二十枚ノ馬ハ多クハアルベカラズ、是ヲトテ二人ノ孫ニ各金二十枚ヲアタヘシト也。古ノ武士ハ皆カクゾアリケルニヤ。

——明良洪範

一、問て云、今時出火ふと有之節、歴々方此義ハ不及申、末々少身忍忍者トても、羽織頭巾ニ胸懸ケ様の物までよも奇羅を盡いとく有之いハ、以前方此事にてい哉。答て云、惣て火事裝束と有之義此初りハ、酉比年^{○明曆三年}大火事以後の義にて、其以前より沙汰も無之事ニハ、子細ハ、酉比年大火の節、少々此義ハ不存、淺野因幡守殿^{○長}より、五萬石領知あらき、大名の義ニハ、今時諸家ニ於て足輕共の着しいとく取る茶色よふすへとる皮羽織ニ紋の付たるを着用あられ、家中にて五百石三百石程ツ、取る騎馬役の侍共

迄、不殘柿染の木綿羽織ニ大紋を出し着仕り、いゝ致して持合、哉、知行取、侍共の中に二三人皮羽織を着致し、る者在、之、いと覺へ申、右火事の日、井伊掃部頭殿を間を見懸、處ニ、是も因幡殿同前、此羽織、よて、馬、此廻り御供致し、侍共の義ハ、皆、木綿羽織を着仕り、と事ニ、其以後ハ、足輕中間風情、此者共、迄も、茶色、此皮羽織を、き、不申、以て、ハ、不被成、と、く、在、之、を、以、上下、此見、さ、う、以、無、之、付、侍分、以上、此者の、義ハ、黒皮の、羽織、を、用、以、申、と、く、夫、段、と、結構、ニ、罷成、羅紗、羅省板の、羽織、よ、色、と、此模様を、致し、頭巾、と、を、も、甲、を見、申、と、く、濡、ひ、さ、し、吹、ら、へ、し、を、致、し、五枚、三枚の、ま、こ、湯、を、さ、け、胸懸、と、よ、も、さ、ま、の、多、や、う、を、仕、る、と、く、罷成、此、二付、當時、火事、裝束、一、と、通り、を、新、念、を、入、仕、立、いと、在、之、へ、と、着料、此、具、足、一、領、お、とし、立、申、程の、物、入、ニ、有、之、也、其、上、武家、方、此、足輕、若黨、と、斗、ニ、も、無、之、町人、出、家、よ、至、る、處、て、火事、裝束、此、支度、を、仕、り、いと、在、之、様、成、義、ハ、以前、と、更、ニ、無、之、義、ニ、いと、之、

一、問て云、御當地町方ニ於て諸賣買物ふとの義ハ、以前も只今も同前此義ニ有之也哉。答て云、我等此若き時分も、今とても曾て相替りとは義も無之

い。乍、去、七十年、斗、以前、ニ、ハ、御當地の、町中、にて、足袋、屋、香具、屋、油元、結店、と、申、義、を、一、軒、も、見、當、り、不、申、事、ニ、也、子細、を、大、火事、以前、の、義、ハ、大、名、方、を、始、と、末、と、此、男、女、共、と、皆、皮、足袋、外、ニ、ハ、用、以、不、申、と、く、在、之、處、ニ、酉、比、年、大、火事、以後、諸、人、共、皮、羽織、皮、頭巾、此、支度、を、專、一、と、仕、此、二付、鹿、皮、の、入、用、多、く、成、此、を、以、革、足袋、の、直、段、高、直、ニ、成、此、二付、末、々、此、もの、を、男、女、共、ニ、お、の、つ、ら、木綿、足袋、を、用、申、と、く、罷成、此、右、皮、足袋、此、節、を、切、革、屋、にて、調、へ、此、二付、別、ニ、お、ん、はん、を、出、し、申、ニ、ハ、及、以、不、申、處、と、木綿、と、以、を、用、以、申、以、來、を、以、店、と、申、義、ハ、初、り、也、扱、又、伽羅、此、油、之、義、七、八、十、年、以前、迄、も、ま、へ、髪、立、の、兒、小、性、ふ、と、此、義、を、格、別、其、外、上、下、共、と、年、若、き、男、此、髪、よ、油、ふ、と、を、ぬ、り、付、いと、有、ハ、取、ぬ、ぬ、る、き、義、ニ、致、し、いと、之、其、時代、ニ、ハ、も、上、此、類、鬚、と、申、義、を、やり、尤、侍、の中、ニ、も、在、之、也、へ、共、先、を、歩、行、若、黨、小、もの、中間、此、類、ニ、餘、多、有、之、也、其、輩、ハ、蠟、燭、の、取、れ、を、油、にて、と、き、ゆる、也、松、や、と、を、加、へ、て、伽羅、の、油、と、名、付、用、以、申、と、く、有、之、也、其、名、も、き、や、ら、の、油、入、用、と、へ、と、藥、種、屋、へ、申、遣、し、調、へ、いと、く、有、之、と、事、よ、い、ゆ、へ、今、時、の、如、く、取、り、伽羅、の、油、店、ふ、と、申、て、と、終、よ、見、懸、不、申、也、且、又、今、時、も、て、と、やし、文、七、元、結、と、申、義、も、以前、ハ、

無之義にて、上下共ニ手前く、にてよりこきをも致して用ひ申とは義も
 て有之いなり。扱又我等若き頃迄ハ、御當地の町方ニ於て犬と申ものハ、
 是ニも見當り不申とく在之いハ、武家町方共ニ下ニ此給物よそ犬増り
 たる物ハ無之とく有之ニ付、冬むきよ成いへそ、見あひ次第ニ打殺し賞翫
 仕るニ付て此義と有之い。

落穂集

萬治寛文のころかとよ、世に鶉はやりて、貴富の家互によき鶉を購いもと
 めし程に、其價しきりに踊貴しけり、阿部豊後守忠秋も其ころ鶉をすかれ
 て常に籠を座側に置いてなかせてきかれけり。それをさる列公なる人さ
 て其ころ世にかくれふき鶉を厚價にてもとめて、ある官醫をもて、ちかき
 ころめつらしき鶉をもとめ得て候、御慰みに進したきよしをいはせけり。
 その官醫豊州のもとへ來て其旨を達して、御もらひ候は、さぞよろこひ
 にてあるへく候といひければ、豊州きかれて、先つよく意得てとはかりに
 とかくの返事なし、去はらくありて近習のものを呼て、鶉籠の口をみな
 庭のかたへむけよとある程に、みな外へむければ、其口をのこりなくあけ
 よとある程に、皆あければ、鶉残らす籠をいて、とひさりぬ、かの官醫み

て不審におもひ、久しく御手馴し鳥にて又立歸へり候にやといへは、豊州
 いやさにてはふし、今日より残らす放ちやるにて侍る。さて序なから申す、
 某ことき上の御威光にて、人に執しおもはるゝ身にて物はすくまじき事
 にて侍る、某このころふと鶉をすき好候へは、はやさやうにきこゆる人も
 おはし候、向後はふつと鶉すきをやめ侍るへしといはれしかは、かの官醫
 も手持なくみへしとぞ。わか數寄たる事はやめかたし、人の志とてたまた
 ま贈る物は、もらひてもさてあるへきを、上の御爲を忘ぬよりして、かり初
 めの事にも、世の風俗へも移り、わか權威にもなるやうなる事はかたくつ
 つしまるゝ程にかくありけり。其外同しころ執權の衆は、いづれもつゆ身
 に驕ふく、權にほこらす、なに事もおほやけに沙汰せられし程に、其風下に
 移りて、末この役人までも廉潔質直なる人ありて、風俗を維持せしそかし。
 されと翁おもふに、風俗の上より下へ移るは、さる事にて、又下より上へも
 移るにてありけり。たとへは上より下へ移るは、水の源すめは下流すみ、源
 濁れば、下流濁かことし。下より上へ移るは、下流泥塞すれば、其泥を上へ推
 のほせて、漸々上流に及ふか如し。今富商大賈の子弟、我人俗吏の惡黨、其外

市井無頼の徒、日夜娼戲場をもて家とし、酒色博奕をもて事とす、其風俗上へ移りて、列侯郡守の身にて、ひそかに娼家の遊を好むもあり、士大夫といはるゝ身にて、きそふて戯場の風を學ぶもあり、是皆下より上へ移るにあらずや。今此流俗を正さんとふらは、いよ／＼上にたつ官長を沙汰して源を澄すともとよりの事にて、又下にある惡黨を搜抉して下流の泥を浚ふへし。

——駿臺雜話

東京市史稿市街篇第七畢

昭和五年三月 十日印刷

昭和五年三月二十五日發行

編纂者兼
發行者

東京市役所

東京市神田區美土代町二丁目一番地

印刷者 島 連 太郎

東京市神田區美土代町二丁目一番地

印刷所 三 秀 舍



IHP-59



